

校区のあゆみ

前芝

豊橋校区史

51

Maeshiba







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 前 芝



ふれあい夏まつり

歴史
history



前芝神明社の御輿渡御（大正13年）
この神事は現在も大切に継承されている。



前芝小学校の校歌にも歌われている「雀射初神事」
（日色野・菱木野天神社にて）



修復された「観魚楼」（38ページ参照）



前芝小学校に設置されている日本最古と
言われる「二宮金次郎像」
（31ページ参照）



前芝中学校の敷地から発見
された「銅鐸」
（8ページ参照）



かつては立干し網や潮干狩りで
賑わった「前芝海岸」

風俗
manners



「海苔すき風景」

簡単そうに見えるが、^す簾に均一に海苔を流し込むのには経験が必要とした。



「海苔の天日干し」

かつては前芝校区の主産業であった海苔養殖。海岸の至るところで見られた天日干しは前芝の冬の風物詩であった。
(16・17ページ参照)

産 業
industry



「佃煮の仕込み作業②」



「佃煮の仕込み作業①」

前芝の佃煮業は現在も発展を続け、日本の伝統の味を守っている。
(22・23ページ参照)



数え25歳・42歳・61歳の年男、数え19歳・33歳の年女が厄落としに餅投げをする「厄祭」
(39ページ参照)



前芝・西浜・梅敷の海岸は「釣り」の名所。特に秋にはハゼを狙う太公望で賑わう。

交流
exchange



「校区文化祭でのお茶席」
世代を超えたほほえましい光景



「校区ふれあい夏まつり」
平成16年度からスタートした新しい活動であるが、子どもから大人まで楽しみながら交流を深める地域活動として定着している。(24ページ参照)



発展
growth

「宅地開発が進む西浜町」
区画整理によって誕生した西浜町には市営住宅も建てられ、住宅地として発展している。

校区内に建設が進む「名豊道路」
豊川橋から北に延びる橋梁工事が進められている。



発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
前芝校区総代会長

牧 平 良 衛

前芝校区は昭和30年3月に宝飯郡前芝村を解村して豊橋市に合併して50周年を迎えます。これが偶然にも市制施行100周年と重なり、同時に祝うことのできる喜びを感じています。

当校区は明治22年(1889)前芝村、梅藪村、日色野村が合併して宝飯郡前芝村になって以来、三町からなる校区でした。しかし、児童生徒数減少からの危機感に端を発した、元梅藪の多くを含む「豊橋前芝西部土地画整理事業」が平成元年に着手され、平成11年(1999)完成しました。校区の人口も市への合併当時には3,565人であったのが現在では、約4,200人と増加しています。道路網の整備などにより本校区の今後の発展はますます期待されています。

市制100周年及び校区50周年の記念事業の一環として、この校区史「前芝」を刊行でき、また多くの事業を行うことができました。多大なご協力をいただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

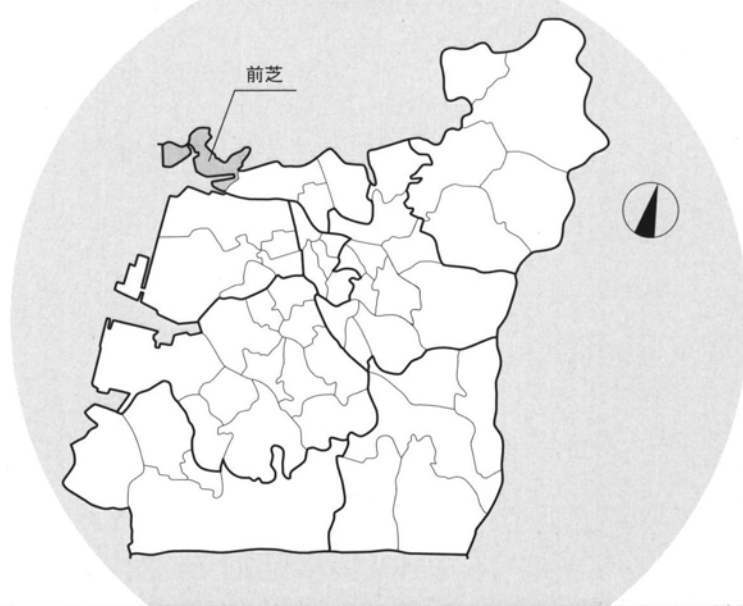
これからも安心・安全な住みよい、より豊かな町づくりに向けて皆さんと共に力を合わせて前進できることを願っています。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境	7	(4) 共同風呂	27
1 土地のようす	7	(5) 消防団活動	28
(1) 校区の環境	7		
(2) 川の流れと台地の形成	7	第3章 教育と文化	29
2 自然との戦い	9	1 学校教育と文化	29
(1) 風水害	9	(1) 第一次世界大戦までの教育	29
(2) 台風13号の爪あと	10	(2) 第二次世界大戦までの教育	31
(3) 豊川放水路完成	11	(3) 第二次世界大戦後の教育と保育	32
3 地震と防災対策	11	2 社会教育と文化	36
4 豊川河口の干潟	12	(1) 農業補習学校	36
(1) 埋め立て前の干潟	12	(2) 青年訓練所	36
(2) 埋め立て後の干潟	13	(3) 戦時体制までの婦人会	36
5 干潟に生息する貝類の現状	14	(4) 戦前戦後の青年団	37
		(5) 戦後の社会教育学級	37
第2章 歴史と生活	15	3 史跡・文化財・奇祭	38
1 前芝の歴史	15	(1) 前芝灯明台と前芝湊	38
(1) 江戸時代まで	15	(2) 空野甚七碑	38
(2) 明治から昭和時代まで	15	(3) 厄祭	39
2 産業の移り変わり	16	4 文化の華開く—人物列伝—	39
(1) 海苔養殖業	16	(1) 空野甚七	39
(2) アサリ採取業	17	(2) 加藤六蔵	40
(3) 観光業	18	(3) 林 虎雄	40
(4) 養蚕業と製糸工場	18	(4) 平野賢治	41
3 校区の概観と産業	19	(5) 山内俊次	42
(1) 景観と人口	19	(6) 塩野谷九十九	42
(2) 農業	19	(7) 松下芝堂	43
(3) 商業	21	年表	44
4 前芝の特色ある産業	22	編集後記	48
(1) アサリ卸売業	22		
(2) 佃煮業	22		
(3) 冷凍食品業	23		
(4) アユ養殖業	23		
(5) うなぎ卸売業	23		
(6) 土壌改良材製造業	23		
5 校区の活動	24		
(1) 校区ふれあい夏まつり	24		
(2) 市民館活動	25		
(3) 敬老会・成人式	26		

校区の位置



第1章 自然と環境

1 土地のようす

(1) 校区の環境

前芝校区は、豊橋平野の西端、豊川河口の右岸をしめ、東海道線豊橋駅から約6km北西に位置する。西は、三河湾や臨海緑地に面し、北西に伸びて御津町、北部は小坂井町に接している。また、東は、放水路に沿って小坂井町平井に続く地域である。

JR西小坂井駅から約3km、名鉄伊奈駅から4km、東名豊川インターから6kmの位置にあり交通の便も比較的良い。また、市役所、ライフポート、豊橋市民病院、総合体育館、図書館など公共施設も比較的近く便利である。さらに、川や海に面し、埋立地の新西浜町と御津地区には「三河臨海緑地」などがあり、自然にも恵まれた地域といえる。



西浜大橋から西浜町を望む

当校区は、明治22年(1889)前芝村、梅藪村、日色野村が合併して宝飯郡前芝村になって以来、三町からなる校区であった。しかし、児童生徒数の減少からの危機感に端を発し、元梅藪の多くを含む「豊橋前芝西部土地区画整理事業」が平成元年(1989)に着手され、

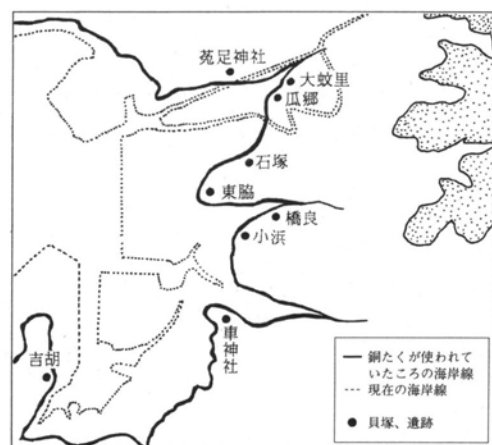
平成11年完成した。平成14年度、西浜町と市営住宅を加え、5総代会となり、児童生徒数も増加している。平成17年10月現在、1,326世帯、人口約4,200人である。また、埋立地の新西浜町(工業用地と準工業用地からなっている)は、人は住んでいないが、前芝校区に位置している。面積は従来の約1.3倍の411haである。

平成14年度には、上渡津橋と西浜大橋がかけられた。現在、名豊道路の建設が始まり、慢性的道路の渋滞も少しずつ改善の兆しが見え始めている。

(2) 川の流れと台地の形成

① 日色野町は小坂井台地の端にあった

前芝校区の地形や自然は、豊川、佐奈川、特に一級河川豊川(古くは飽海川と言った)を除いては語れない。大部分は川の働きによって形成された沖積層に属し、水田に利用されている。しかし、日色野町の一部は、小坂井町方面から続く台地の西端に当たり、洪積層地帯で畑地が多い。前芝校区は豊川右岸に



銅鐸が使われていた2,000年ほど前の海岸線

位置するが、2,000年ほど前の縄文時代後期まで、現在より内陸奥深くまで入り込んだ遠浅の海であった。

洪積台地と豊川が形成した沖積地に接する河岸段丘の線に沿って、菟足貝塚、稲荷山貝塚、日色野貝塚など縄文遺跡が点在する。それらの遺跡から種々の貝類が発掘されたことで、人々は、台地の先端に生活していたことが証明されている。また、大正13年（1924）前芝中学校現校地から、銅鐸が3個も発見された。このことから、日色野が小坂井台地の端にあったことを伺い知ることができる。



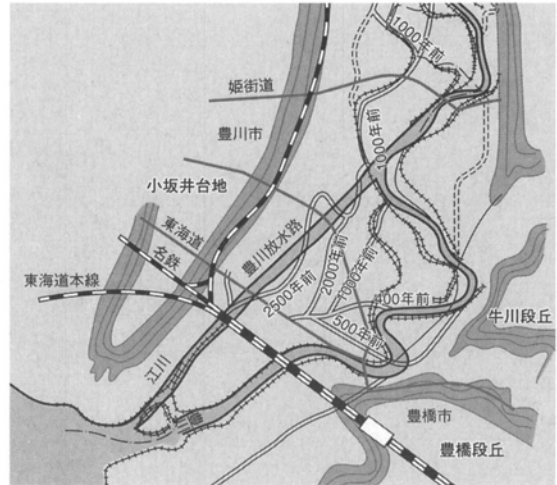
銅鐸が発見されたときの様子

銅鐸が埋められていた前芝中学校の字名が「塩見塚」である。この地名は海に突き出た小高い丘であり、目の前に広がる海の干満を見て生活したことから付けられたと思われる。このことから、弥生時代以前から、人々はおもに海や川から恵みを得て暮らしていた生活が推察できる。そして、周りを取りまく水田や海岸に近い前芝、西浜、梅藪は、当時は海の中だったと考えられる。

また、小坂井台地の地質は、第4期層の末期であって、ローム白色黄砂、粘土層や礫層からなっていて、一見して洪積層であることがわかる。

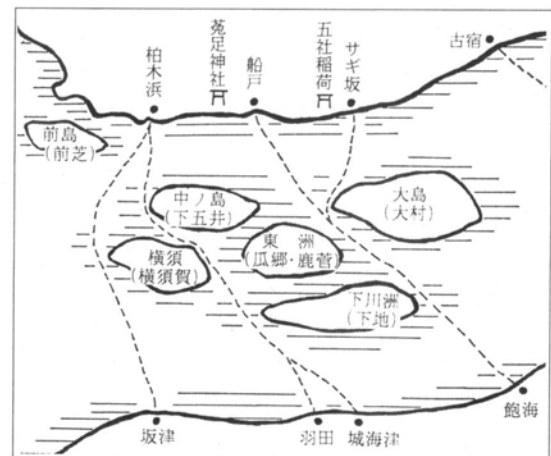
② 川の働きが前芝の台地をつくった

現在の前芝、西浜、梅藪の各町は、それぞれ豊川、佐奈川、河口の自然堤防上に古墳時代の頃からつくられた村である。台地の形成は豊川、佐奈川等の川の働きによるところが大きい。



豊川流路の移り変わり略図

縄文時代前期（紀元前四千年頃）の豊川河口は、幅約4kmの入海になっていたとされている。豊川（飽海川）は大昔から幾度も浸食、堆積を繰り返し、洪水とともに流れを変えてきた。縄文後期になると、変遷図でわかるように豊川の流路は現在の大蚊里（大村町）瓜郷あたりとなった。鎌倉時代は、最も大きく迂回しており、現在のような流れになったのは、室町時代中期以降である。



志香須賀の渡しがあつた頃の豊川河口

豊川の流れは、上流から土砂などを運んで洲を造り、葦などの植物を生やすという繰り返しの繰り返しによって次第に木や草が生える島がつくられていった。奈良時代（710～784）の豊川下流部は、所々に砂洲が顔を出す広大な入り江になっていた。

志香須賀の渡しがあった頃の古文書には、大村、津田地区と共に前芝地区にも「前島」「前の島」という名が記載され、小坂井台地の南西に土地が形成されたことがわかる。

現在の西浜、梅藪は、佐奈川下流に元梅藪の砂洲が発達し、次第に島を形成するようになった。やがて、浅海の後退と共に平井や日色野の台地に続くようになった。人々は、貝類などを採取して生活していたため、利便性から、河口の自然堤防上に生活の場を広げていったと思われる。

しかし、千年昔の文書にはこの辺りに、菱木野荘、平井荘という地名は見当たらない。豊橋農協前芝支店の南辺りを「堤上」それより北の水田が見られる辺りから北は「堤下」という字名である。これは、水害から難を逃れるために堤防を築いて生活の場にした名残であろう。また、梅藪に「洲崎」または、「磯」という古い地名が残っているのは、土地形成を物語るものと思われる。

③ 豊かな清水が湧き出していた

小坂井町と豊川低地の間には、北東から南西に向かって段丘崖がある。本宮山の方向から小坂井台地へ地下水が流れてきている。従って、日色野町から小坂井、豊川の三明寺近くまでの段丘崖では、豊富な地下水が湧き出たため池が点在していた。豊かな清水は稲作に利用され、厳冬でも14℃内外の水は、洗濯場であり水浴びなど貴重な憩いの場でもあった。しかし、現在は、ほとんど空池の状態になってしまった。

その主な原因は、上流での汲み上げや町や

道路がコンクリート化されたり、雨水の排水設備が完備されて地下に浸透する水の絶対量が減少し、水位が下がったためであると思われる。

しかし、地名にその名残を見ることはできる。日色野町の熊野神社前の「金の舟伝説」が言い伝えられている「お御手洗^{みたらい}」には、今も雨季になると、時々清水が湧き出ることがある。日色野の子供たちが通学で横切る下佐脇へ抜ける道路わきに「水弘法」と呼ばれる祠^{ほころ}がある。ここは、美味しい水がこんこんと湧き出ている、行きかう人々が喉を潤していたことから「水弘法」と呼ばれるようになったと言われている。



水弘法堂

各家庭では、昭和50年代始めまで地下水を汲み上げて生活していた。しかし、産業の発達と共に水質が悪くなり、前芝、梅藪では、地下水に海水が混じる現象も起こるようになった。上水道が完備されると、ほとんどの家庭が水道水を利用するようになった。

2 自然との戦い

(1) 風水害

海岸に近い前芝、西浜、梅藪は標高2m、日色野は2.5m位である。豊川は、木曾川や矢作川と比べて流路の全長が短く、河道の勾配が大きく利水、地水面で制御の困難な川であ

った。当地区は大昔から洪水や高潮にたびたび苦しめられた地域であり、風水害との戦いの歴史であった。

天文9年（1540）には、大津波（大暴風雨）が襲い近隣の村も大被害を被った。高潮、洪水のため前芝神明社や津田校区の進雄神社の社殿が流失した記録が残っている。

当時の梅藪の人々は、元梅藪と現在の土屋敷に住み、佐奈川はその南東を流れて現在の前芝館近くに流れ出ている。しかし、この時の大洪水により現在の流路が変わって村が二分され、神社も流失し目も当てられない惨状であった。住民は住む所もなくなり、領主のはからいで仮小屋を建てる土地が与えられ、一時伊奈の北村、正庵辺りに住んだ時期があった。その後、領主の指導で現在見られる碁盤状の集落が出来上がった。

この時、領主に協力したのが伊奈の西藏寺といわれ、被害を受けた43戸の住民に2町1反余りの土地を与えた。救われた人々は、それ以後、子孫が代々正月と盆にお礼に上がったといわれている。また、河口の丘の上に逃げた人は助かったので、この丘は今でも「命山」と呼ばれることにつながった。



前芝村外豊川河口新田絵図

上の絵図は、前芝村を中心として周辺の新田を描いたものである。中央に浮かぶ島となっているのが加藤新田である。もともと南側の高須新田に接して開発されたもので渥美郡

に属していた。この絵図でわかるように、加藤新田の東と北は大川通りと書かれており、豊川は前芝の南側を流れていた。しかし、年代の特定はされていないが、大洪水のため排水用の堀割川が押し広げられて本流同様になってしまい、豊川は現在の流路となったのである。また、大正15年（1926）には、東三河一帯に大暴風雨とともに高潮が襲った。前芝大橋は橋脚の一部を残し、すべて流失してしまった。堤防も元梅藪地区を始め、加藤新田、日色野村など多くの箇所が決壊し、大きな被害が出ている。当地方は、豊穰な海や川の恵みを受けて生活してきた反面、常に自然災害との戦いを余儀なくされてきたのである。

(2) 台風13号の爪あと

前芝の水害の歴史で記憶に新しい災害は、昭和28年（1953）9月25日の台風13号である。



台風13号の経路図

この台風は、上の図で分かるように午後7時頃、岡崎市付近を通り、中部山岳に去った。この台風が当地方の西側を通過したため、風雨が激しかった上、ちょうど大潮の満潮時に一致したため、沿岸一帯の堤防が何箇所も決壊し、大災害となった。

前芝では、死者2名、全半壊家屋77戸、漁船も流失17隻を含め、被害42隻、農作物は秋の実りの時期で大被害を被った。写真から当時のすさまじい被害の状況を知ることができる。



倒壊した建物と子ども

(3) 豊川放水路完成

昭和34年（1959）犠牲者数千人を出した「伊勢湾台風」の時、当地区は、すでに護岸堤防が完成していた。そのため、幸いにもほとんど被害を受けることはなかった。豊川流域の低地平野部を洪水から守るための「豊川放水路計画」は、国や県としても昭和の初めからの懸案であり、上流域に生活する人々にとって切なる願いであった。

しかし、豊川本流のどこの位置から導水路を掘削するか問題であった。三河湾へ放流する案は、1案から4案まで検討され、紆余曲折を経て現在の豊川市正岡町に分流堰を設け、全長6.6km、川幅120～160mの放水路で三河湾へ分流する事になった。

昭和13年（1938）に工事を着工したが、太平洋戦争激化のため中断を余儀なくされ、昭和27年から再開された。そして、昭和40年（1965）7月、通水式を終え、ついに多額の費用と歳月をかけた大プロジェクトは、幾



放水路築堤工事の様子



加藤新田から見た豊川放水路

多の困難を克服して完了した。

放水路完成により、豊川流域で生活する人々は、やっと水害の恐怖から解放されることになったのである。しかし、漁民にとっては、放水のたびに船を船溜まりに退避する必要が生じるなど、問題もあったようである。

この放水路は、広島県の太田川、静岡県 の狩野川と共に、戦後におけるわが国の三大放水路としても有名である。

放水路は、国土交通省、豊川河川事務所が管理している。前芝など5ヶ所の観測所から本宮山無線中継所を経て、豊橋工事事務所の情報センターに水位および降雨データが送信される。これらの情報に基づき、雨で豊川が増水して危険になると、分水ゲートが開けられ放水している。この10年間の年平均放水回数は、約4.8回である。放水する時は、サイレンを鳴らして流域住民に事前に知らせている。前芝校区は豊川橋に設置された警報所、また、「日色野放流表示所」でも知ることができる。それとともに、流域にある樋門が閉められ、放水路からの逆流を防ぐシステムになっている。樋門の開閉は、前芝消防団や土地改良区が受け持っている。さらに、校区には4機の排水機が設置されて、冠水被害に備えている。

3 地震と防災対策

甚大な被害を出した10年前の阪神大震災、一昨年の中越地震は記憶に新しい。その後も

各地で地震が起きており、防災に対する対策が叫ばれている。当地方も過去大地震を経験している。

昭和19年12月（1944）の東南海地震、翌1月には三河地震、昭和21年12月の南海地震と連続して大地震が襲い、各地区に人的、物的に多大な被害をもたらした。当地区は比較的軽微な被害であったが、人々は、海苔を干すたこを立てて安全にした小屋や、防空壕に寝るような生活を余儀なくされた。その恐ろしさは、今も語り草になっている。

近未来に予測されている巨大地震「東海地震」「東南海地震」に対し、県や、市でも地震防災対策をたてている。木造建築は耐震不適合が危惧され、平成14年度より無料診断を行ったり、耐震補強に対する補助金支給など本腰を入れて対策に取り組み始めている。学校の校舎や体育館の耐震工事を平成19年度中に終える予定であり、また、津波の内湾対策として、当校区に防災無線が一基設置された。各校区では防災訓練を実施したりして、人々の危機管理意識の啓発に努めている。

「豊橋市地域防災計画」資料編（平成16年度修正）によると、前芝校区は両地震とも震度6弱、また、両地震が連動して起こった場合、震度6強が予測されている。そして、加藤新田、前芝町の一部は、液状化現象など危険度が極めて高い地域とされている。

「東南海地震」の具体的な被害予測は、起こる季節や時間によって違うが、死者は1人、建物倒壊棟数87戸（3.9%）負傷者38～60人が想定されている。前芝を含む豊橋海岸は液状化の発生しやすい「要対策区域」であり、地震が発生した場合、護岸堤防の被害が心配されている。そこで、県は平成17年、護岸堤防の改修事業計画に向けて調査を始めることを明らかにした。

命や財産を守るために、校区総代会を中心

にしてひとり一人が土地の成り立ちを理解し、他校区以上に巨大地震に備えることが今日の課題となっている。

4 豊川河口の干潟

(1) 埋め立て前の干潟

干潮になると、干潟を流れる豊川を見ることが出来る。流れの北側が西浜であり、南側が六条潟である。干満の差は、最大2.6mであり、大潮の干潮時は、写真で見られるように、およそ2km余の見事な白砂の干潟が出現した。



昭和38年の西浜の干潟

西浜、六条潟は淡水が流れ込み栄養分も多い絶好の海苔漁場で、労働は過酷であったが冬季現金収入のドル箱的存在であった。子供たちも手伝い、どの家も競って生産に励んでいた。産卵最適地のアサリは言うに及ばず、カレイ・ヒラメ・セイゴ・クルマエビ・カニ・ボラ・ハゼなどが獲れ、昭和40年代までは、漁船漁業も盛んであった。その他、貝類とともにカニなど甲殻類や釣りの餌になるゴカイ等の多毛類が生息する豊かな干潟であった。

(2) 埋め立て後の干潟

① 漁業権放棄と生活の転換

昭和30年代から日本は、高度経済成長期を迎え社会状況が急激に変化した。昭和39年(1964)三河港港湾計画がたてられるとともに、東三河地域が「工業特別整備地域」に指定された。こうした国家的プロジェクト事業により、港湾や臨海工業用地を造成するため、漁場が潰されることになった。

昭和43年(1968)ついに漁業補償協定が結ばれ、六条潟・西浜における漁業の歴史の幕は閉じられることになった。校区民の大部分を占める漁業者たちは、漁業補償後、海での仕事を廃業し、生活の転換をはからざるを得なくなった。

比較的農地を多く持つ人たちは、温室やハウス農業へ転換をはかった。また、大部分の人たちや若者は、時代にも恵まれ会社や工場などへ働きに出たりして、それぞれ生活の糧を得る道を進んだのである。

② 豊川浄化センター

県は、豊川流域の関係市町と一体になって健全な水環境を確保し、公共用水域の水質保全を図るために、昭和46年(1971)に「豊川流域下水道計画」を策定した。昭和49年埋め立てが開始され、新西浜町に、東三河七市町とよがわの下水終末処理場である「豊川浄化センター」がつくられた。

そして、昭和55年(1980)に供用が開始さ



埋立地の新西浜町と豊川浄化センター

れ、各河川の水環境の改善と生活の快適性の増進に貢献している。さらに、将来の下水処理需要の増加に備え、広い予備地(約4割)が確保されている。

前芝校区に東部幹線の下水道本管が埋設されたことにより、当地区は少ない負担で下水道を利用できるようになった。

③ 干潟の変貌

新西浜町、御津町佐脇原の埋め立て造成工業用地は、御津2区と呼ばれ、分譲面積37haの広大なものである。事業主体は愛知県企業庁であり管理も行っている。経済状況の変化もあり、西浜の埋立地の工場誘致は計画通りに進まなかったが、最近になって工場の進出が見られるようになってきた。

御津2区の埋め立てに、西浜の土砂が大量に使われたために、ほとんどの白砂が失われ、西浜の砂洲の様相は一変してしまった。



現在の西浜の干潟

豊川上流にダムが作られて流量の著しい減少とともに、富栄養の生活排水や産業排水が海に流入し、三河湾の海底はヘドロ化が深刻化している。毎年のように赤潮や苦潮(青潮)が発生し、酸素不足となり貝類の生息環境が著しく悪化してしまった。

豊橋駅が出来たのは、明治21年(1888)である。それ以降、東京で消費される6~7割もの白魚が前芝産であった。その事は「修善寺物語」で著名な作家岡本綺堂のエッセー

「白魚物語」に書かれている。しかし、水の清浄さのバロメーターでもある白魚は、今やわずかに生息している程度になってしまった。海の環境悪化が問題になるとともに、社会状況の変化で埋め立ての是非が問われるようになってきている。現在の状況では、神野新田の二十間川以北の六条潟・西浜の埋め立ては、中止される模様である。

国や県はかつての姿を取り戻すために「シーブルー事業」を進めている。この事業は干潟・浅場を人工的に造ることで、アサリなどの生息場所を確保する事業である。自然な浄化作用を高め、きれいな海を取り戻そうとするもので、御津2区地区でも試みられてはいる。かつて海や川の豊かな恵みを受けて生活してきた校区民としては、子孫のために昔の豊かな海の回復が切なる願いである。

5 干潟に生息する貝類の現状

生息環境の悪化により、ハマグリは生息できなくなり、種類や個体数も減少したが、まだ、多くの貝類が生息している。

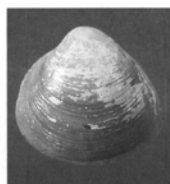
しかし、平成10年（1998）愛知県が示した貝類レッドリストによると、ムラサキガイやサビシラトリガイは絶滅危惧種に、マテガイなど3種が準絶滅危惧種に指定されさらなる減少が心配されている。反面、現在見られる砂州の状況になってから際立って増えた貝として、カキ（マガキ）がある。カキは、石などに付着して成長繁殖したり、豊川の流量の減少により塩分濃度が高まったため、現在の環境が適しているといえるからである。

平成16年5月、前芝の干潟で豊橋市自然史博物館主催の自然観察会「潮干狩りで生き物を探そう」が開かれた。写真で示した貝類は、平成16年に採取したものだけでなく、近年生息していたものも含まれている。

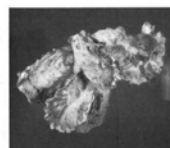
前芝の干潟に見られるおもな貝類



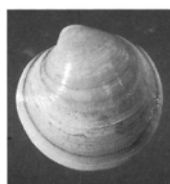
サルボウガイ
(殻長75mm)



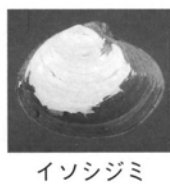
シオフキガイ
(殻長40mm)



マガキ



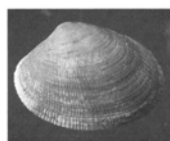
オキシジミ
(殻長50mm)



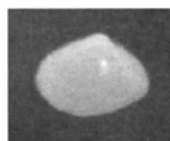
イソシジミ
(殻長60mm)



カガミガイ
(殻長60mm)



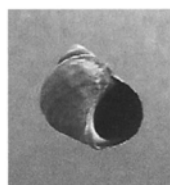
アサリ
(殻長40mm)



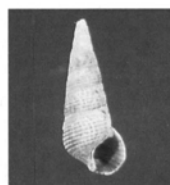
ユウシオガイ
(殻長25mm)



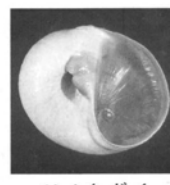
アラムシロガイ
(殻高17mm)



タマキビガイ
(殻高17mm)

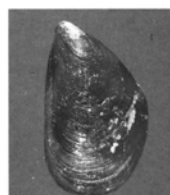


ホソウミナ
(殻高30mm)

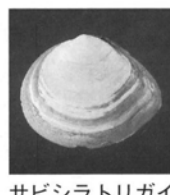


ツメタガイ
(殻高70mm)

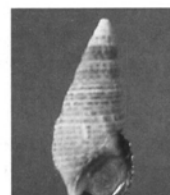
(絶滅が心配されている貝類)



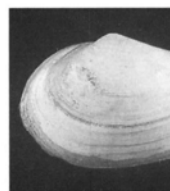
ムラサキガイ
(殻長90mm)



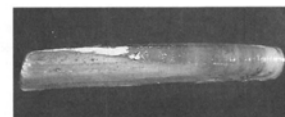
サビシラトリガイ
(殻長60mm)



ウミナ
(殻高30mm)



オオノガイ
(殻長100mm)



マテガイ
(殻長120mm)

第2章 歴史と生活

1 前芝の歴史

(1) 江戸時代まで

今から500年ほど前（戦国時代）の頃に書かれた「領地安泰」（りょうちあんたい）という文書に「前芝」という地名がはじめて現れる。前芝で一番古い西福寺の過去帳によれば、この寺は1475年につくられたことがわかる。400年ほど前には、当時三河地方を治めていた戦国大名の今川義元により、前芝村だけが白魚（漁）を許可された。このことから繁栄しはじめた前芝の姿がうかがえる。

梅藪は、古くは洲崎といい、江戸時代から梅藪村として独立していた。天文9年（1540）に大津波（高潮）が襲い、人家が流失するという大惨事があり、その後もたびたび水害を受けた。塩浜などもあったが、宝永4年（1707）の富士山噴火による大地震の時塩浜を失った。これがのち山内新田になった。正徳2年（1712）には再び全村流失という災害にあった。その後、復興に努めて、享保3年（1718）には検地を受けるまでになった。

江戸時代になると新田開発がさかんに行われた。西浦新田（1686）青木新田（1693）加藤新田（1696）中村新田（1707）山内新田（1731）など、開発された年のわからないものをあわせると、新田の数は14にもなる。

また、江戸時代は、吉田藩の支配を受けていたが、時には天領（幕府直轄地）として支配されたこともあった。

前芝村が、港や漁業で栄えたことは、1868年に前芝灯明台が青木新田の堤防上に建設さ

れたり、現在の加藤家の祖先が廻船問屋を営み、多数の船をもち、江戸や下田、鳥羽など各地に廻船を出していたりしたことからわかる。また、1851年、魚市場の独占を認められていた魚町の商人と街中で魚を売り歩いていた前芝・牟呂村の漁民たちとが対立し7年間にも及ぶ争いとなったが、吉田藩の仲裁により魚の販売ができるようになった。（魚出入り）

文化11年（1814）杵野（もくの）甚七は、前芝村の農民の子として生まれ、40歳の時、ハマグリを囲った萱（す：竹や葦などを荒く編んだ物）に海苔が付着しているのを発見し、海苔養殖ができるのではと考えて、先進地の情報を仕入れたり、養殖方法を見聞したりして、1854年に、しい・かし・くりなどの枝で実験し、三河湾でも海苔養殖ができるという確信を得た。これが、豊川右岸、西浜漁場のはじまりとなった。

(2) 明治から昭和時代まで

明治5年（1872）額田県は九大区に分けられ、前芝地区は第六大区に属していたが、額田県が愛知県に合併された。明治7年9月改めの各村戸籍簿による村の戸数、男女別人口は次の通りである。

前芝村	253戸	男544人	女587人
梅藪村	87戸	男202人	女222人
日色野村	56戸	男111人	女122人

明治9年に大小区制が廃止され、宝飯郡は第十六区に変更され、その会所は御油駅に置かれた。明治17年、県は日色野村、前芝村、平井村を第八組として、その戸長役場を前芝

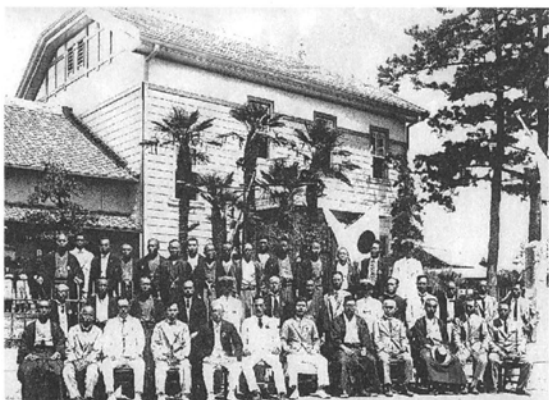
村に、梅藪村、伊奈村を第九組として、その戸長役場を伊奈村に置いた。



加藤家と醤油工場（明治39年5月）

明治21年（1888）市町村制が制定され、翌22年町村制が施行された。翌23年に前芝村の青木和市が初代村長に、日色野の山内弥右衛門が初代助役、梅藪の牧野喜代蔵が初代収入役で、新前芝村が成立した。

大正13年（1924）に前芝村地先水面埋立地（外浜新田）を編入した。



前芝村役場（昭和6年8月25日完成）

昭和7年（1932）豊橋市は、工業化する立場から、大工場の日本人造羊毛株式会社を高須町高須新田に誘致しようと計画した。工場の排液が水産業に及ぼす影響を心配した沿岸漁業者は、東三水族擁護同盟会（会長加藤六蔵）を創設して、反対運動を進め、昭和9年（1934）2月、工場誘致を断念させることに成

功した。昭和20年（1945）6月、東海道線西小坂井駅は、戦時中に住友金属小坂井工場が軍需工場として創設され、その貨物駅として開設した。昭和23年8月、旧駅舎を小坂井町や前芝村などの寄付金（前芝村7万5900円）で造った。

昭和30年（1955）2月28日に、宝飯郡前芝村は、渥美郡二川村、高豊村、老津村、八名郡石巻村と共に解村して、翌3月1日に豊橋市に合併した。当時の前芝村は、人口3,565人、宝飯郡の中では最も少ない人口であり、面積は2.82平方キロと小規模だった。この合併先については、各字の総会で、一部、豊橋市の都心部重点政策を懸念して、環境のよく似た小坂井町、御津町への合併を発言するものもあった。しかし、耕地がわずかで、農業として専業することは不可能であることから、漁業権問題を解決するには豊橋市の市政のもとに入ることがよいという意見が多かった。

2 産業の移り変わり

(1) 海苔養殖業

明治36年ともなると、豊川の河口一帯で海苔の養殖に従事する人は、およそ1,000人にもなり、生産額は7万円をあげたと記録されている。明治39年には、前芝、牟呂付近の海苔生産者と販売業者によって、「三河海苔改良組合」が結成され、明治45年には、同業組合法による三河海苔同業組合が設立され、販路の拡張、品質向上につとめ「三河海苔」の名称を広めていった。大正年間から昭和初期にかけてはさらに発展し、六条潟を中心とした東三河地区は、日本三大海苔の生産地といわれるようになった。

昭和10年には、東三海苔振興会の会員は、18漁業組合で構成され、総戸数3,100余戸の業者が加入していた。

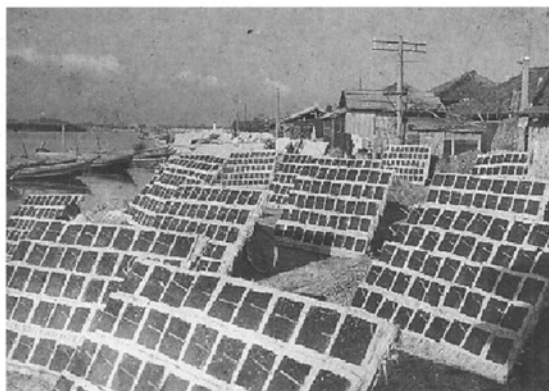
【昭和10年度 海苔生産量 生産額】

前芝組合	8,818,000枚	75,285円
梅敷組合	5,002,000枚	46,186円
日色野組合	1,231,000枚	13,235円

【昭和38年度 海苔生産量 生産額】

前芝組合	15,366,050枚	238,034千円
梅敷組合	7,713,310枚	113,583千円
日色野組合	2,147,630枚	32,489千円

昭和28年に愛知県水産試験場で、従来の女竹や檜木を海に建てる立体的な養殖方法を改めて、南洋産のヤシの繊維を網に編んだ物を、適当水位を定めて水平張することに成功した。さらに、野外人工採苗の技術開発、採苗網の冷蔵保管、浮流し海苔養殖の開発など、生産



海岸のいたるところで海苔の天日干し

技術の進歩により海苔生産量も増加した。

昭和35年（1960）～昭和44年（1969）の海苔養殖の統計を見ると、前芝・梅敷・日色野組合の海苔生産量が一番高いのは、昭和36年度である。

昭和38年度（1963）の日本全体のノリ生産は、約30億枚と言われ平年作の2割5分減となった。東三地区も平年作の2割5分減であったが、金額においては、不作の影響で価格が急騰し2割5分増の30億余円の増収をみた。

【昭和36年度 海苔生産量 戸数】

前芝組合	24,176,000枚	315
梅敷組合	14,434,000枚	137
日色野組合	3,878,000枚	51

【昭和44年度 海苔生産量 戸数】

前芝組合	11,181,000枚	220
梅敷組合	11,049,000枚	119
日色野組合	738,000枚	39

そして、昭和40年（1965）から海苔生産量は急激に落ち込み、昭和44年（1969）に増加（梅敷は前年の10倍）した。

(2) アサリ採取業

六条潟や西浜は、古くからハマグリ、アサリの最適な漁場として知られていた。また、アサリ種子も珍しく繁殖する漁場であった。昔は種子の繁殖が多すぎて処置にこまり肥料用として採取した時代もあった。特に戦中戦後の食料事情が悪い頃、アサリの需要が増え、貴重な存在となり、貝付アサリ、アサリむきみ、佃煮用ゆでみなどで販路が多くなり、夏は、海に出て生活費を稼いでいた者が多かった。この頃より、県下沿岸にアサリ養殖業が盛んとなったが、その種子の産地は他には少なかったことからほとんど種子は六条潟で取れたものを各地の養殖場に供給していた。当時、種子採取口開日ともなれば、六条潟の沖合は種子を買い入れる大型漁船が数十隻も待機して先を争って買い入れていた。

【昭和38年水揚地別漁業種類別漁獲量 kg】

区分	漁獲高	採貝	刺柵網	その他
前芝	1,293,640	1,132,100	146,669	14,871
梅敷	813,817	809,917	—	3,900
日色野	137,478	137,100	240	138

また、昭和38年の魚種別漁獲量において、アサリの占める割合は前芝（85%）梅敷（99%）日色野（95%）と高い。前芝では、魚類（12%：アジ・スズキ・ウナギ・ボラ・その他の魚）の割合もかなりある。



栄楽屋前の立干し網漁（昭和30年）

(3) 観光業

前芝海岸は、昔からアサリ、立干し網を楽しむ汐干狩客や海水浴客でにぎわった。奥三河をはじめ、岐阜、長野、静岡県方面より飯田線やバスに乗って来た。前芝館や大長館・丸ま館などの旅館があった。

海水浴場としての歴史は古く、大正初年頃から飯田線沿線から海水浴客が来たと考えられる。海水浴場の棧敷は4軒あったといわれる。当時平均8千人から1万人ほどの客があったと推定される。戦後は一時中断されていたが、昭和23年頃には、棧敷は、栄楽屋、鈴木屋、つる屋の3軒であったのが、昭和28年（1953）には6軒に増加している。西浜海岸



海水浴場と棧敷（昭和30年）

の総棧敷坪数は約百坪で、使用客は、1軒に70人から80人、6軒で約300人といわれている。

昭和30年頃の年間海水浴客は、家族連れが多く5千人から6千人と考えられる。また、7、8月には観光としての立干し網を楽しむ客も3千人ぐらい来ていた。

(4) 養蚕業と製糸工場

前芝村の畑作は、麦・綿・サツマイモなどが主な作物であったが、日清戦争頃から製糸業の発展とともに、桑畑が拡大していった。明治40年頃には、桑畑の面積は80～90町歩にまで広がったが、化学繊維の普及により衰退し、昭和20年（1945）には、養蚕家は二戸だけになり、昭和28年の13号台風で桑畑を失った北河竜次を最後に、村の養蚕業は姿を消した。



約100年前の繭を入れた倉庫（前芝町）

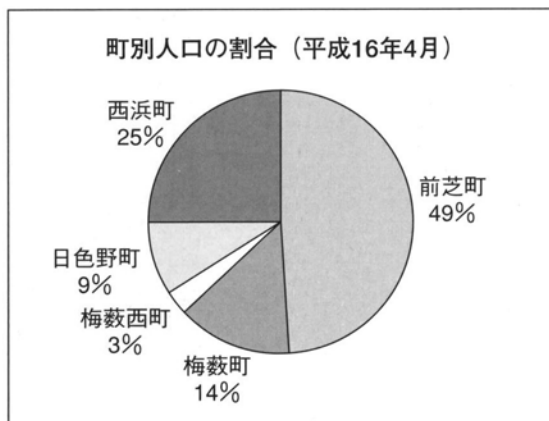
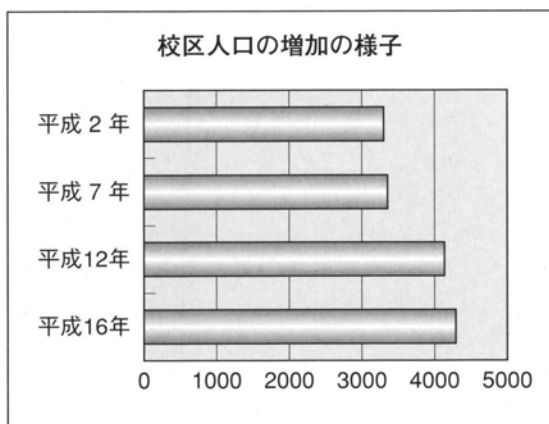
養蚕業の発展にともない、製糸工場を経営する者ができ、北河丈吉は、明治33年（1900）6月に工場を操業した。その後次々と工場が造られ、最盛期の昭和7、8年には、4工場で釜数360、工員499人で、年生産も、生糸3,000～4,000貫、玉糸8,000貫の生産をあげていた。女工さんは、新城や南設楽・北設楽方面や静岡県から働きに来ていた。また、前芝の人も働いた。しかし、大正から昭和の不況が続く、昭和12年（1937）に示（やまこ：経営者北河小三治）製糸が廃業した。戦争中の国の政策により昭和18年（1943）に笠（や

まさん：経営者北河耕次郎）製糸工場が廃業し、一時軍需工場として飛行機の部品を造っていた。



北河製糸工女修養会（昭和10年頃）

前芝の耕地は少なく、総耕地の約60%が水田で、畑地では、大半が自家用野菜を栽培する程度であった。海岸沿いという地理的条件から、ノリ養殖・アサリ採取などにより農家経済を補う半農半漁が多かった。「夏は陸で田に立ち、冬は海でノリを採る」というなりわいだった。



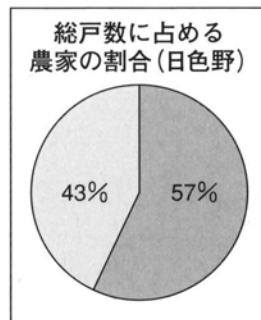
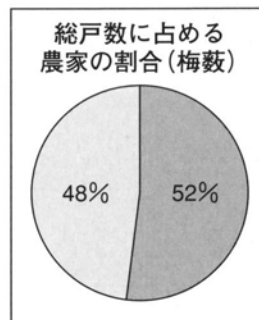
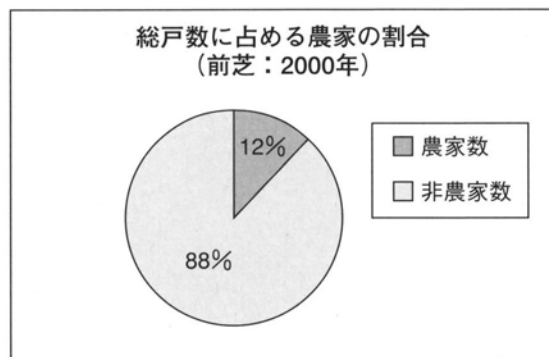
3. 校区の概観と産業

(1) 景観と人口

豊橋市の都市計画総括図によれば、前芝町、梅敷町、西浜町の大部分は、第一種住宅地域に指定され、住宅地や宅地開発がされている。都市計画道路名豊線（一般国道23号線バイパス）沿いや豊川橋付近は、準工業地域に指定され、工場や商店・自動車修理店などが見られる。そして、小中学校周辺や日色野町は、市街化調整区域に指定されているので、昔ながらの田園風景が広がっている。

豊橋前芝西部土地区画整理事業（平成11年2月完工式）により、平成10年7月より新しく西浜町ができた。西浜町は、旧梅敷町元屋敷（宇塚公園より堤防側）と旧前芝町字宇塚・字西青の地域を造成してできた住宅地である。最近の前芝校区の人口増加は、主に西浜町に転居してきた人たちによるところが大きい。平成16年の前芝校区の人口は、約4,200人である。

(2) 農業



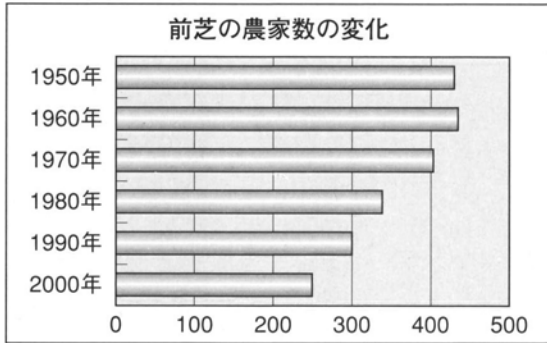
農業統計によれば、前芝校区内の農家数は1970年代より減少してきている。西浜町は農業統計の調査区分では前芝と梅藪の二つの地域に入られている。前芝での非農家数の占める割合が88%とあり、梅藪と日色野との違

いが顕著である。

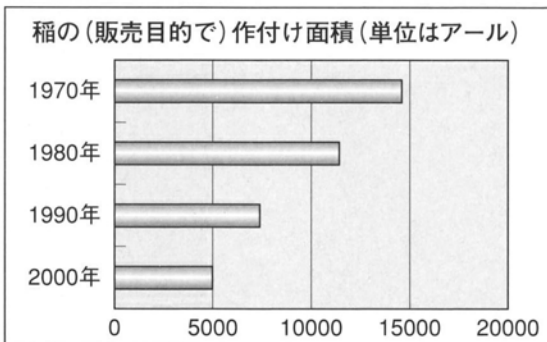
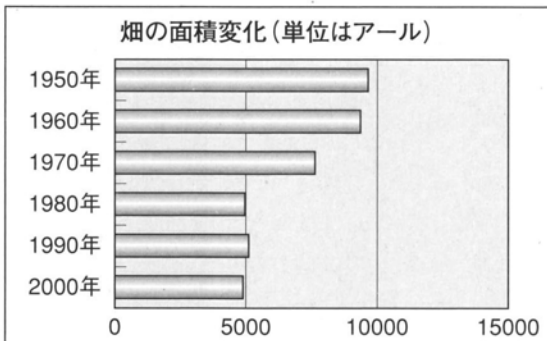
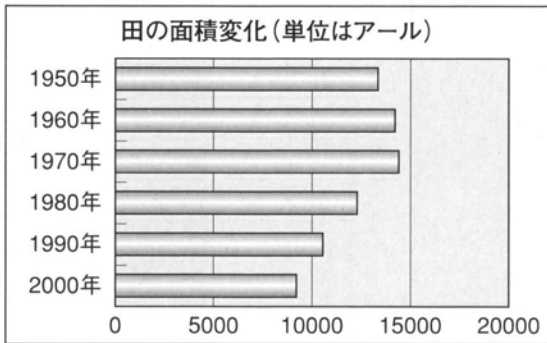
田・畑面積の減少とともに、稲や野菜の作付面積も減少している。(但し、1990年より統計調査が販売目的での栽培に変更された) 国の農業政策の変化による農業従事者の減少、農業従事者の高齢化などにより、休耕田や遊休地が見られるようになった。

① 前芝の稲作農家Nさん

昔は、農業と海苔で生活していた。父親の跡をついで、10年前から夫婦で米作りをしている。おいしくて、安全な米を生産するために、試行錯誤しながら、無農薬・有機農法に取り組んでいる。現在は、請負農地を含めて、米(9ha)と転作作物の小麦(4ha)を生産している。米の品種は「コシヒカリ」(4~5月に田植え)「祭り晴」(5月中旬)「あいちのかおり」(5月下旬~6月)である。生産した有機米は、顔の見える(信頼関係で販売)市内の米店や予約した顧客に販売している。これからの米作りについて、Nさんは「自給的な小規模経営をするか、大規模経営をするかの二極化すると考えられる。また、安定した経営をするには、飛び地になっている請負農地の集約化など大規模経営がしやすいような行政の支援が必要である。」と話してくれた。そして、前芝小学校の5年生は、毎年Nさんや地域の人たちの協力で農業体験学習を行っている。



【1950年1960年面積単位は1反(約10a)】



稲刈りをする5年生：品種は「祭り晴」

② 梅薮のイチゴ栽培農家Sさん

30年前から父親たちが幸田にイチゴ栽培の研修に行き、栽培を始めた。父の跡を継いで、20年前から農業をしている。5年前から、ハウスの高設栽培（ベンチにプランタを載せるので作業姿勢が楽で、プランタに定植したイチゴに液肥を与えて育てる、収穫時期が長くなる）をしている。JA豊橋のイチゴ部会員は梅薮では18軒である。JAに加盟していない農家も5、6軒ある。イチゴの品種は「とちおとめ」「章姫」（あきひめ）であり、消費者の好みで、日持ちがよく、甘く大粒な品種が作られる。9月に苗を植えて、11月から5月ぐらいが収穫時期である。夏場は苗作りや米作りをしている。梅薮の多くのイチゴ農家は、ハウスで無菌の土を使って栽培している。夏場は涼しい作手の畑で苗を育てる方法（現在4軒）、畑でポット栽培する農家もある。これからのイチゴ栽培について、Sさんは「イチゴ生産量は、後継者難もあり全国的には増えていない。よい品質のイチゴを生産していれば他の産地に負けない。梅薮の生産者も高齢化してきているので仲間が減るのが心配である。」と話してくれた。

③ 日色野のシクラメン栽培農家のHさん

30年前からシクラメンの栽培をしている。JAに加盟しているが、種・肥料の購入、出荷はすべて個人で行っている。現在は7品目栽培している。春は花木（かぼく）系「ボロニア」、秋は鉢物「シーマニア」、冬はシクラメンを栽培して、東京や大阪などに出荷している。最近では、シクラメンの生産量が増え高級品のイメージがなくなり、価格も低下している。17年度からミニバラの栽培を始めた。

④ シソ栽培農家の人たち

日色野のSグリーンハウスでは、大葉を栽培して、パック詰めをして東三温室組合に出荷している。昔は、トマトやナス、キュウリ

などを栽培していたが、20数年前から大葉を栽培し始めた。ハウスを使い、冬は暖房をして2回半のローテーションで栽培している。梅薮でも3軒ぐらい栽培している。最近では農薬の制限もあり、害虫駆除作業が大変である。

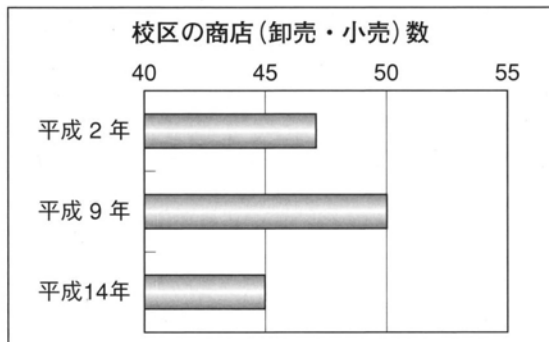
日色野のY農園では、平成2年より、シソの「花穂」と「穂シソ」を（組合で改良した種を使う）ハウスと露地で年中栽培している。パックに詰めて豊橋温室組合に出荷している。「花穂」は刺身のつまや天ぷらとして利用される。「穂シソ」は酢の物や和え物として利用される。害虫の駆除作業が大変で、病気に気をつけている。「花穂」と「穂シソ」は、豊橋の特産物で日色野のSさんが始めて、現在、日色野で2軒と梅薮で1軒栽培している。



花穂の木箱詰め作業

(3) 商業

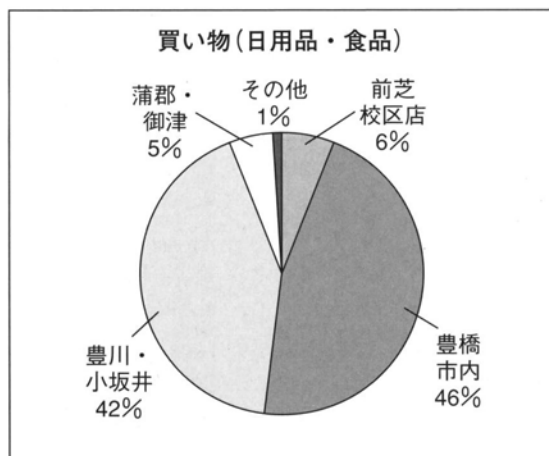
平成14年商業統計調査結果からみると、豊橋市の商店数、年間商品販売額も、前回調査（平成11年）に比べると約1割減少している。市外に購買層が流出している傾向も見られる。前芝校区でも、人口増にもかかわらず、商店数、年間商品販売額ともに減少している。また、居住地別・買い物場所調査では、郊外部の北部・前芝地区の特徴として、市外へ買い物に行く人の割合が13.7%（豊橋市全体4.6%）と高い。さらに、一般小売店で買い物をする割合の減少傾向-5.6%（豊橋市全体-4.9%）となり、8.3%となっている。



前芝校区には大型店はないので、販売額減少など、校区の一般小売店への影響も大きいと考えられる。

校区の事業所(小売業)の分類別数は、織物・衣服(1店)、飲食料品(9店)、自動車・自転車(8店)、その他(11店)の29店である。卸売業を含めた事業所数は、45店になる。

平成17年の5月のアンケート調査(前芝小学校6年生の保護者など約75家庭)の結果をみると、買い物(日用品・食品)では、前芝校区の店を利用している人もいる。昔から地域の人と結びついた日用品・食品店が各地域にあり、コンビニも2店ある。



理容店は前芝町に3店、美容院は西浜町に1店ある。地域の店を利用している人も多い。

交通量の多い国道23号線沿いに、飲食店があり、校区の事業所で働く人や校区の人に利用されている。しかし、外食(家族で行く飲食店)では、校区外に行く人の割合が高い。

4. 前芝の特色ある産業

(1) アサリ卸売業

生きたアサリを集荷して、全国に出荷する卸売業者は、前芝のS水産、O水産、M水産、梅敷のM水産である。夏は、渥美や知多のアサリを扱い、冬は、山口県や九州の業者からのアサリを扱う。量は少ないが、浜名湖や地元のアサリを扱う業者もある。空の貝殻やゴミを取り除き、海からパイプで引いた海水でアサリを洗い、砂ぬきをしながら水槽内で生かしておき、注文に応じて、箱詰めして全国に出荷している。昔は、前芝付近の海で大量にアサリが獲れ、値段も安かったが、最近ではアサリの値段が高くなり、生かして出荷するためや産地名の表示などの手間もかかり、商売も難しくなっているそうである。



小袋に詰められ出荷されるアサリ

(2) 佃煮業

前芝の佃煮業は、大正11年(1922)4月に梅敷の山安日商店が、三河地方のアサリ、ハゼを佃煮に加工したことから始まった。アサリの佃煮を作っていた業者は豊橋にもたくさんあったが、魚など他の食品に食材を広げてきたので、日本の伝統の味、佃煮業が、今も前芝で発展している。材料は安定して入荷する冷凍物を使っている。アサリやマグロは中国産、イワシやサンマは国内産を使い、全国に出荷している。また、イワシやマグロなどの魚を袋に詰める時、形が崩れてしまうといけなので手作業で行っている。佃煮の種類

もアユ、ニシン、アナゴ、ワカサギなど種類も多く、佃煮の煮汁は継ぎ足していくので、その会社によって味もちがっている。

現在、三河佃煮工業協同組合に加盟している会社は、梅藪のH食品（平成12年に御津に新工場）、前芝のM食品（昭和29年創業）、S食品、M食品の4社である。



手作業でパック詰めされる佃煮

(3) 冷凍食品業

23号線沿いのM水産は、昭和30年代は、漁業を営み、三河湾のアサリや海苔、魚を獲って三谷魚市場や豊橋魚市場に出荷していた。昭和44年より、冷凍食品を製造することになった。当時は、夏は地元のアサリを冷凍して、大手企業のN食品と取引するようになった。秋は蒲郡のミカンを冷凍ミカンにした。冬は梅藪や幡豆、横須賀の協力農家から仕入れたイチゴを冷凍ジュースに加工した。

昭和50年代から、外国から輸入した冷凍エビを解凍し、加工したり、パック・袋詰めしたりしてN食品ブランドの冷凍食品として、外食産業や大手スーパーなどに出荷するようになった。現在は、冷凍エビ関係が6割を占める。また、中国の委託工場から冷凍食品（アサリ・レンコン・ゴボウ）を輸入したり、ベトナムから冷凍エビフライを輸入したりして、販売している。

(4) アユ養殖業

前芝中学校横のN養魚場では、ハウスの水槽の中でアユが育てられている。昔は、海苔や農業をしていたが、昭和47年、田に養鰻池

を造り、ウナギ養殖を始めた。20年ほど前から、ウナギからアユ養殖に代わった。養殖を始めた頃は、琵琶湖の稚魚を育てていたが、自然のアユはどうしても病気をもったアユがいるので、6、7年前からは、人工的に育てられたアユの稚魚を渥美の業者から購入し育てている。ハウス内で育てているのは病気や鳥（糞を防ぐためであり、温度管理はしていない。水槽は年2回のローテーションで使用し、一年間に90万～100万匹のアユを関東、関西方面に出荷している。豊富な地下水を使い、病気が出ないように注意しながら養殖している

(5) ウナギ卸売業

西浜のK商店は、ウナギの卸売りをやっている。平成4年に、商売をする上で交通の便がよく、地下水が出て、排水路のある西浜に移転してきた。当時はまだ区画整理されていなく、周りには池や田があり、1m～1.5mも掘れば、よい地下水が自噴してきた。今は、西三河（幡豆）や豊橋の養鰻業者から仕入れたウナギを、地下水を流しながらウナギをバケツの中で生かし、注文に応じてエアーを入れた箱に詰めて全国に出荷している。

(6) 土壌改良材製造業

日色野のM開発のMさんは、昭和42年頃、海苔とアサリ、養豚、トマトなど半農半漁で生計を立てていた。昭和44年7月から、養豚から出た堆肥を利用して肥料を製造・販売する企業的な経営を進めた。堆肥にオガクズを混ぜると臭いが消え、ベタベタしなくなる。完全発酵した物をグリーン芝の肥料として全国のゴルフ場へ出荷している。ゴルフ場建設ブームにもものって経営規模も拡大し、昭和61年(1986)、ゴルフ場関係では全国17%のシェアを占めていた。現在、原料となる豚や牛、鶏フンなどは、田原の専門業者から堆肥を買っている。また、家庭用園芸肥料や園芸用の土をホームセンターにも販売している。

5 校区の活動

(1) 校区ふれあい夏まつり

「校区の住民が協力して行事を行うことにより、連帯感や連携を強める」ことをめざして、平成16年からスタートした新しい活動である。親睦を図ることが大きな目的であるが、地域の子どものための健全な育成活動の一環にもなればとの願いも込められている。

こうした活動がスタートした背景には、大人、子どもを含めて地域全体のつながりや絆の希薄化が浮かび上がる。隣近所の者でも知らない、協力して活動する場が少ない、群れて遊ぶ子どもたちも少ない等、現在の日本の社会状況がそのまま前芝校区にも当てはまるが、これを解消し楽しい交流を通して活力と魅力ある前芝を築き上げようとする機運が高まった姿ととらえることができる。

第2回の夏まつりは、平成17年8月6日に中学校の運動場・体育館・教室等を会場に盛大に開催された。『笑顔・ふれあい・おもしろい』のテーマの横断幕も掲げられた。



校区ふれあい夏まつり①

校区総代会が主催し、共催は校区健全育成会や各種団体（PTA、JA、老人クラブ、民生委員会、郵便局、消防団など15団体）で、それぞれ趣向を凝らした活動が展開された。野外ステージも町議員等の協力で作られた。以前、青年団が主催した「盆おどり」が復活したのもうれしい限りである。

午後5時、開祭宣言と爆竹、くす玉割りで賑やかに始まった。保育園児の和太鼓演奏には、父母や祖父母の温かい眼差しと大きな拍手が送られた。照明で明るい運動場には、10以上のテントが張られ、かき氷や焼きそばなどの模擬店、的当てなどのゲームに多くの子どもたちや親が集まった。みんな笑顔で、楽しくはしゃいでいる光景は、主催者たちを喜ばせた。



校区ふれあい夏まつり②

体育館の中では、社教主催の「校区懐かし写真展」が開かれた。何十年前のふるさと前芝の様子が手に取るように理解でき、多くの人が懐かしそうに見て回っていた。

午後6時には、くじ引き大会。この抽選券は全世帯に配付されたもので、ここにもこの夏まつりを校区全体で盛り上げようとする主催者側の細かい配慮がうかがえた。

その後、JA女性部と青年団OBが中心となって盆踊りが始まった。威勢の良い太鼓に合わせて「一休さん」「燃えよドラゴンズ」などの曲が、踊りの輪を広げた。踊りが最高潮に達した午後7時半頃に閉祭宣言。時間的には短かったが、中身の濃い、充実した楽しい夏まつりとなり、参加者は満足気であった。

1,000人以上が同じ場所に集う夏まつりの企画、運営には関係者の大変な苦労がともなうが、校区民の心をつなぎ、楽しく交流するためのたいへん意義のある催しとして継続・発展していくことを祈りたい。

(2) 市民館活動

昔から、前芝の人はとりわけ「芝居」が好きであったようである。戦後から昭和30年代にかけて、祭りには芝居や歌謡ショー等が行われた。日色野には「沢村茂美次一座」があり、各地に公演に出かけていた。

海苔養殖、あさり採取といった厳しい海を舞台にした大変な労働を強いられた、この海辺の人々にとって芝居は唯一の楽しい娯楽であったに違いない。その当時の公民館や集荷場は、人々のための産業・娯楽の拠点だった。



青年による素人歌舞伎

昭和21年（1946）から、小学校・中学校・保育園合同の連合学芸会が、旧正月を中心に開催されるようになったが、時には前芝公民館でも行われたという記録もあり、当時の公民館が地域の諸活動の中心的な役割を果たしていたといっても過言ではない。

昭和30年3月、前芝村は発展的解消をして、豊橋市に合併された。同年の世帯数は226、人口は3,556名であった。こうした大勢の町民が、「集いの場」「憩いの部屋」「学習の場」として気軽に使うことのできる施設として昭和50年3月、前芝地区市民館が完成した。鉄筋コンクリート2階建て、総事業費は4,700万円であった。1階は、図書談話室、婦人室、事務室。2階は、集会室と高齢者室からなる立派なものであった。

平成17年度の市民館活動としては、高齢者セミナーと料理教室など5つの市民館講座が開催され、俳句・短歌・絵手紙など13の自主

クラブ、計120名以上の会員が活動を楽しんでいる。



地域活動の拠点・前芝地区市民館

これらの活動は、毎年秋に行われる「前芝校区文化祭」に直結し、展示室等には、手芸品・洋裁・編み物・生花・書道・短歌・俳句・南画・トールペインティング・盆栽・瓢箪・パッチワーク・布花・茶花・子どもの作品等が所狭しと並べられ、参観者の目を大いに楽しませてくれる。この文化祭は、市民館まつりとも呼ばれ、市民館活動の中では年間最大の行事となって定着している。



校区文化祭（お茶席）

また、平成16年度の室利用者数は16,000名、図書貸し出し280名、ヘルストロン利用者数は6,000名を超えている。

特筆すべきは、『市民館だより』である。A4裏表印刷1枚を毎月1回発行する。平成17年末で322号となった。30年近く続いており、市民館の歴史とほぼ同じである。前芝校区民の心と心をつなぐ貴重なコミュニケーション手段となっている。前芝校区以外では、ほとんどが「回覧」であるが、本校区では、全戸に配付という形をとっており、このことは大いに誇れることである。

(3) 敬老会・成人式

昭和2年2月に前芝村女子青年団が生まれ、これで男女の青年団が存在することになった。彼らは、夜学会や入隊除隊兵の歓送迎や祭典余興の施行などを精力的に行ったが、その中に「敬老会」も含まれていた。この事業は戦後も引き継がれ、『前芝村誌』によれば、「青年団が中心となり、毎年一回老人を敬い慰労する会が開かれる。敬老会の日には演芸を行い記念品を贈り、会食をして一日を楽しく過ごす」とある。

昭和56年度敬老会演芸プログラムには、司会進行に青年団とあり、その頃までは青年団が中心となっていたが、その後、総代会、社会教育委員会、民生委員会などが行った。現在は、総代・社教委員・町議員の約80名の実行委員で運営に当たっている。



敬老会

さて、この敬老会に祝賀される高齢者は、75歳以上の方である。最近の高齢化に伴ってその数は年々増加している。約20年前の昭和62年には三町合わせて234名だったのが、平成17年には408名と、倍近くになった。ダイヤモンド婚（結婚60年）で表彰される組数も平成16年度は、6組の多きに達した。このことは、大変喜ばしいことである。

この祝賀会の楽しみは、アドラクションである。平成のはじめ頃までは、町民が舞踊や詩吟、民謡に出演していた。昭和56年には25

組もの参加があり賑やかであったが、その後、出演者の減少に伴い外部に依頼することが増えた。太鼓、マジック、民謡、舞踊、落語などが行われてきた。

この敬老会の会場は、小学校の体育館であるが、会場への送迎はすべて町議員たちの車で行われ、参加者から喜ばれている。先輩を敬い、大切にす精神は、この前芝校区でもしっかりと受け継がれている。

豊橋市では、昭和24年（1949）に第1回成人式を各校区で実施という形で行った。この形式が続いたが、昭和37年からは市体育館で合同で開催されるようになった。しかし、トラブル等があり、昭和45年から現在まで、各校区で実施するという形が続いている。

実行委員会も敬老会と同じく総代・社教委員・町議員が担当し、新成人をお祝いしている。新成人の数は、毎年40名前後で推移してきたが、平成18年度は54名に増加した。

式次第は大体どこも同じであるが、記念品のアルバム贈呈、卒業当時の担任への花束贈呈と恩師あいさつ等は心温まるものがある。他市では、市民会館などの施設に新成人全体を集めて大がかりな式典を行っているものが多いが、小規模でも校区の大勢の先輩たちが祝い、厳粛かつ温かい雰囲気の中で進行されるこの成人式は、まさに手作りの味がする、すばらしいものであると思われる。



成人式

(4) 共同風呂

共同風呂は、かつて海苔養殖が盛んに行われていた海岸沿いの集落に多く見られた。半農半漁のたいへん忙しく厳しい一日の仕事を終えた人たちが、すぐに入れるようにと考えられ、建設されたのであろう。最盛期には、豊橋市内で26か所も存在したということである。

本校区の各町内にもあった。梅藪町には、上湯と下湯（梅藪西）の2か所があった。上湯の共同風呂が最も早く明治38年に、下湯が大正末期にできた。日色野町では、大正5年頃、お寺の境内につくられた。建設資金は、各家の資産状況により10トウコ（10段階）に分けて徴収された。修理資金も同じ方法であった。前芝町には、2つの銭湯があったが、いろいろな事情で廃業したので、昭和18年に共同浴場を神社境内に新築した。総工費は約43,000円で、328戸が組合員であった。この共同浴場は、昭和38年に焼失したので、その後、新たに再建された。

毎日、多くの人たちが集まる共同風呂は、村の情報センターとしての役目を果たし、また楽しみ場でもあった。どの風呂にも掲示板があり、寄り合いなどの連絡、漁業組合の海苔入札案内や入札状況の報告、祭りや運動会の日程、商店の広告など多岐にわたる内容のものが掲示された。共同風呂は、村民たちの情報交換の場として大きな役割を果たしていたのである。

男性は、女性に比べて夜は比較的暇であった。テレビ等のない時代では、共同風呂で話をするのが大きな楽しみであった。前芝町の場合、脱衣場には男性側だけに和室があり、横になってゆっくりと話すこともできた。和室のない共同風呂では、ゴザなどが敷いてあった。また、大きな火鉢が置かれている所もあったということである。

女性は、夜もいろいろと忙しくて、ゆっくりとはいかなかったが、それでも浴室や脱衣場では世間話に花を咲かせることができた。前芝町の共同風呂には、婦人会が寄贈した、「赤ちゃん台」（台の下に脱衣籠が入る）が8台置かれていた。



梅藪共同浴場

共同風呂では、みんなが赤ちゃんに温かい気配りをしてくれた。お年寄りが赤ちゃんを湯に入れてくれたり、服を着せてくれたりした。お陰で若い母親たちは、ゆっくりと風呂に入ることができたということである。

子どもの頃の共同風呂での思い出が、今も懐かしく語られる。「サツマイモを持っていき、釜で焼き芋を焼いてもらった」「湯に潜ったりして遊んだ」「共同風呂でお年寄りの話を聞くのが楽しみだった」等々。

当時、芝居がこの地で盛んであったが、青年たち（現在、60歳代）の間に、素人歌舞伎をやろうという話がまとまり、11名が沢村一座の指導を受けて練習し、春の祭礼や敬老の日に演じ、おひねりの飛ぶ大好評を博したという。これも共同風呂あつてのものといえよう。

しかし、漁業権を放棄した昭和43年頃から内風呂を造る家が増えて、共同風呂は衰退に向かった。日色野町が昭和48年に、梅藪町の上湯が同50年、下湯が同55年に、また、前芝町が平成8年にそれぞれ閉鎖された。この閉鎖は地域力低下の一因かもしれない。

(5) 消防団活動

三河湾に面し、豊川が近くを流れる前芝校区民は、遠い昔より水との長い戦いの歴史の中で生きてきた。さらに、狭い地域に家々がびっしりと立ち並び、細い道路がその間を縫うような町並みは、火災その他の危険と常に隣り合わせであった。

平成15年度、市は防災都市づくり調査を実施し、「優先的・重点的に整備すべき地区」として、この前芝地区を他の3地区と共に抽出した。この地区は、特に危険度が高く緊急的な整備が必要だということである。折りしも東海地震、東南海地震等の発生も心配されている。本校区の防災・消防活動の歴史を見つめ、さらに充実・発展を期していかなければならないと思う。

国は、明治27年、「消防組規則」を公布し、自治体消防制度の基礎を定めた。前芝消防組は、明治35年に金属製腕用ポンプを購入し私設消防として活躍していたが、明治44年に公設前芝村消防組として発足した。大字前芝が第1部、大字梅藪が第2部。しかし、大字日色野は私設消防として残された。

昭和14年、前芝村消防組を前芝村警防団と名称を改め、前芝・梅藪・日色野の3箇分団となった。戦後の昭和23年、警防団を消防団と改称し、消防長には村長が就任した。

昭和30年、豊橋市との合併に伴い、豊橋市前芝消防団前芝分団（3字で1分団）として



放水訓練風景

再発足したのである。団長1、副団長3、前芝（部長2、団員28）、梅藪（部長2、団員23）、日色野（部長2、団員17）の合計78名の編成であった。

消防施設の状況は次のとおりである。

【前芝】

- ・明治35年、金属製腕用ポンプ購入、その後計4台購入
- ・昭和2年、手引ガソリンポンプ購入
- ・昭和24年、市原式手引ガソリンポンプ購入
- ・昭和28年、小型四輪自動車ポンプ購入

【梅藪】

- ・大正2、11年、金属製腕用ポンプ購入
- ・昭和23年、手引ガソリンポンプ購入
- ・昭和28年、小型四輪自動車ポンプ購入

【日色野】

- ・大正2年、金属製腕用ポンプ購入
- ・昭和28年、三輪自動車ポンプ購入

慶応3年の大字前芝で250棟を焼失した大火、明治38年の梅藪素蓋鳴神社拝殿全焼などの火災が十数件記録されている。

暴風と水害については、昭和28年の台風13号がこの地区に大災害をもたらした。死傷者5、罹災者3,562名、家屋の全壊・流失253、床上床下浸水739、被害総額約1億2千万円であった。災害救助法が発動され、消防団を主体として堤防の応急汐止工事が、その夜から徹夜で行われた。

昭和41年、1団8方面隊56分団、団員1,300名の新生豊橋市消防団が誕生した。昭和58年、前芝地区が1分団となり、下地・大村・津田と合わせて4分団、90名からなる第八方面隊は、市内最小規模であるが伝統の消防精神を受け継いで活躍している。

第3章 教育と文化

1 学校教育と文化

(1) 第一次世界大戦までの教育

① 学制施行以前（維新前）の教育

豊橋市美術博物館に収蔵されている加藤家所蔵文書と、昭和6年8月3日付けで報告された前芝尋常高等小学校発行の「維新前寺子屋、郷学校、手習師匠、私学校の調査」によると、明治5年の学制発布、明治6年の学制施行前における当時の教育の場は寺院が中心で、宗教と教育とが深い関わりをもって展開されていた。

16世紀に建立された前芝の西福寺と蛤珠庵、日色野の神泉寺、梅藪の観音寺では、正確な年号までは記録がないものの、それぞれの地域で、寺子屋としての役割も果たしていた。教師数は1～2名、入学したのは8歳から9歳までの男子で、人数は20名～30名程度、読み書き習字を中心に学んでいた。修業年限は1～4年と弾力的だった。休業日は特になく、毎日午前8時から午後3時までの日程（一部施設は1時間ずつ後倒しの日課）で授業が続けられていた。

読み書き以外の教育として、前芝で石田東馬が珠算塾を主宰し、昼間に寺子屋で学習した後に珠算を習う生徒も多数いたことが記されている。

江戸時代中期以降、前芝湊は、諸国の廻船や伊勢参宮客でにぎわい、交通・文化の要衝として、多数の文化人が訪れ、漢詩や和歌を始めとした文化が広がっていった。後述の3史跡・文化財・奇祭の項目を参照されたい。

② 明治5年学制発布から～公立学校の歩み

明治5年の学制発布以来、教育刷新の機運が次第に高まり、明治6年（1873）6月15日に巴水学校が誕生した。当時の前芝村に日色野村と平井村が併合された連合体として、前芝村の西福寺に設立された学校である。当時梅藪村には学校はなかったが、明治12年5月15日に第百五番小学梅藪校が現在の梅藪公民館付近に設立された。

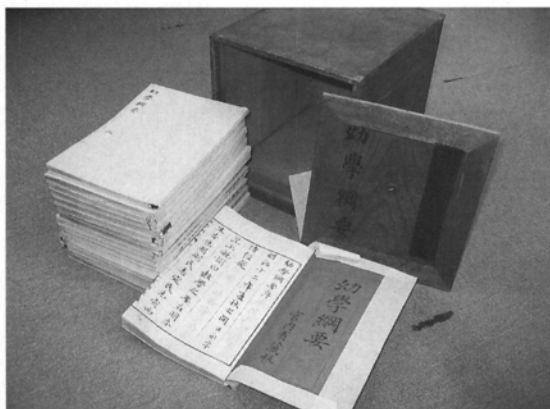


第1回前芝尋常小学校卒業記念写真

日色野村と平井村が前芝村から分離した明治9年（1876）、巴水学校は前芝村立前芝学校と改称された。日色野村の子どもたちは明治15年（1882）神泉寺を仮校舎とした菱木野学校（日色野学校）が設立されるまでは、平井学校へ通学をしていた。

当時の梅藪学校の設立願、菱木野学校建築伺書と菱木野学校土地契約書から読み取れるのは、教師が1～2名の規模、支那学・習字・算術・珠算などが資格研修として定められていたことである。ここで支那学とは、現在の漢文学に相当しており、生徒は「読み・書き・そろばん」が中心の教育課程であった。

③ 明治20年ごろ～町村合併と小学校令時代



幼学綱要全18巻と保管の木箱

明治16年（1883）宮内省から『幼学綱要』全18巻が全国の有力学校に下賜された。忠節や勤勉、忍耐など20の徳目について大意を示したもので、明治23年（1890）に明治天皇が発布した「教育ニ関スル勅語」の元になった書物で、当時の木箱に納められたまま代々の校長に受け継がれてきたと伝えられている。平成17年（2005）現在でも保存状態はよく、虫食い一つない貴重な歴史物である。

明治19年（1886）の各学校令より学校種別に制度化され、翌明治20年4月に平井学校と日色野の両学校は再び前芝学校に合併して三村連合立の学校となり、また梅藪学校も伊奈学校に合併をした。

明治22年町村制が敷かれ、平井村が豊秋村に、また旧前芝村と旧梅藪村と旧日色野村が統合されたが、学区は変わらないため、梅藪の児童は伊奈学校に通学を続けた。

明治23年の小学校令に基づいて明治24年11月、文部省「小学校教則大綱」が定められ各教科目の教授内容が明確に定まった。明治25年（1892）小学校令が改定され教育内容や制度の国家統括が進められ、町村内の学校は1校だけと指定されたため、10月1日、前芝字西2番地に前芝村立前芝尋常小学校が創立され、前芝・日色野・梅藪の児童が通学するようになった。

④ 前芝尋常小学校の稲場移転

明治28年12月、前芝字稲場1番地に新校舎が完成、移転した。学齢児童数も300名以上に増え明治42年（1909）校地を拡張し校舎が増築された。

明治45年（1912）5月、修業年限4年間の高等科が併置され、尋常小4年、高等小4年の前芝村立前芝尋常高等小学校が発足した。強健な身体づくりを狙いとして明治45年4月に尋常小が豊川堤防（津田学校横）、高等小が石巻山へ遠足に行った。以後、春秋の年2回徒歩訓練が続いた。教育が軍事的色彩を帯びてきたのもこのころからである。大正3年（1914）から3年間、豊川グラウンドで宝飯郡東部落連合運動会が開催され、陸上競技のリレーは宝飯の1、2を争った。



陸上競技リレーの記録写真

⑤ 日本最古の二宮金次郎像

薪を背負って、本を読みながら歩く二宮金次郎像は、昔からほとんどの小学校にあり、全国のいたるところで建設されている。これほど多く普及した背景には、明治・大正・昭和を通じて修身の教科書に登場し、人々の生き方に大きな影響をもたらしたこと、報徳思想の普及とともに、国内初等教育の理想的人間のシンボルであったことがあげられる。

前芝小学校で学び、村長、県議会議員、衆議院議員を歴任した加藤六蔵は、報徳精神の影響を強く受けて、その思想を前芝村の次代

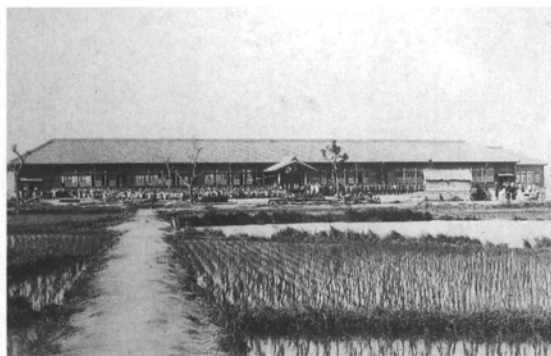
を担う子どもたちに浸透させたいと願い、母校前芝小学校に二宮金次郎の寄付を思い立った。二宮金次郎像の制作を、前芝生まれで書生をしながら彫塑彫刻を学んでいた藤原利平に依頼した。

藤原は薪を背負い、本を読みながら歩む木製の小さな二宮金次郎像を参考にして、魚貝類豊かな前芝に合わせて、左手でピク（魚やアサリを入れる竹製の容器）を背負い、右手に本を持った金次郎を構想した。骨組みにセメントを塗っては彫ることを繰り返して、大正13年（1924）に前芝町字稲場にあった前芝小学校の正門脇に、作品を設置した。子どもたちは登校時、二宮金次郎像の脇を通る時、どの子どもも必ず深々と礼をしていくなど礼儀正しい様子が語り継がれている。

⑥ 前芝小学校塩見塚への移転

前芝町稲場の校舎は増築を繰り返していったものの、その後も児童数は増加し続け、校舎の増築のために運動場の面積も児童数に対するのバランスが大幅に崩れていった。また学校の位置が梅敷、日色野からきわめて遠いため村の中央部となる字塩見塚に移転することが検討された。

しかし、広大な用地の取得や校舎の新築費は極めて多大であり、その上に、用地の買収も難航したが、村当局の熱意と地域民による特別寄付（資金総額の8割に相当）で待望の移転が昭和2年（1927）4月に実現した。



昭和2年移転当時の前芝小学校

(2) 第二次世界大戦までの教育

昭和4年にはじまった世界恐慌は学校生活にも影を落とし、経済的な理由から登校できない児童や登校しても給食時に欠食する子どもが急増した。各自治体でさえ、支援どころか、一般予算まで困窮する事態となった。昭和6年の満州事変に前後して、働くことの大切さを強く求めた労作教育として、運動場の一部で炭焼き学習やさつま芋栽培が展開され給食に活用された。

① 国家主義体制下の前芝教育

（昭和7年～15年）

国家主義強化の時代背景から、「四期の国定教科書が「サイタ、サイタ、サクラ」に代表される国家主義、兵隊についての学習が推進された。昭和11年1月1日に今上天皇の御真影（写真）が下付されることになり、奉安殿が新築された。当時の教科書については、地域の方が数多く所蔵されてきている。

② 戦時体制下の前芝教育

（昭和16年～20年）

昭和16年3月に「国民学校令」が公布され、同年4月1日に、校名を「前芝国民学校」と改めた。この国民学校は国家主義教育の典型として生まれてきたもので、従来の修身・国語・理科・体操などの教科を、皇国民の練成ということから、国民科、理科科、芸能科、体練科などに編成され展開された。

昭和17年に学徒動員令が下り、昭和19年に前芝国民学校の児童が工場に動員され、高等科の授業は中断した。昭和19年から高等科2年女子全員が前芝村の山三工場へ、高等科2年男子27名が小坂井町住友工場へ、高等科1年男子全員が豊川海軍工廠に動員された。翌昭和20年（1945）前芝国民学校生徒隊を結成し、軍事教練を徹底していった。

昭和20年8月7日、豊川海軍工廠が爆撃を受け、学徒動員されていた前芝国民学校高等

科1年男子10名は非業の死を遂げた。

『戦没学徒の碑』は昭和28年に父母教師会により建立されたもので、前芝中学校の正門の横に移築され現在に至る。



戦没学徒の碑

(3) 第二次世界大戦後の教育と保育

(昭和20年～22年)

① 民主主義と六・三制

(小学校と中学校の分離・独立)

昭和20年(1945)8月終戦後、9月から各学校は授業を始めることとなった。軍国主義・国家主義の教育体制は廃止されていった。学校敷地から撤去された奉安殿は、前芝神明社の水屋として移築された。

昭和22年(1947)3月、「教育基本法」と「学校教育法」が公布され、教育の機会均等や9か年の義務教育、男女共学、社会教育などが重視された。こうした民主主義を基調とした「六・三制」は、昭和22年4月1日に発足し、前芝国民学校は宝飯郡前芝村立前芝小学校に改称した。

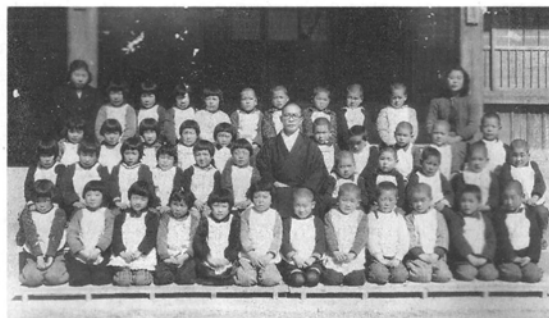
また、修業年限2年の高等科を廃止し、修業年限3年の新制中学校として、宝飯郡前芝村立前芝中学校が新設された。

そして、戦時体制の激化とともに中止されていた学校行事(学芸会、運動会、遠足、修学旅行)が復活していき、体験活動を通じて心身を鍛える教育が展開された。

② 前芝保育園のあゆみ

前芝保育園のルーツは昭和21年12月より、前芝町の西福寺の村瀬鏡真住職が56名の幼児

の保育活動をはじめた私立三ツ葉保育園である。終戦直後の衣食住のあらゆる物が不足する混乱期に、子どもたちの食育・しつけに取り組んだわけである。



三ツ葉保育園の第1期生記念写真

昭和26年7月1日より前芝村へ移管され塩見塚での新園舎で宝飯郡前芝村立前芝保育園がスタートした。新園舎は元豊橋騎兵連隊の建物が払い下げられたもので、平屋建ての105坪だった。



前芝保育園の平屋建て園舎

学習発表会として、当時の神社境内の芝居小屋で遊戯会や学芸会も行われ、村中の人々がふれあう交流の場として賑わった。



昭和24年保育園学芸会演技

昭和28年（1953）9月25日に襲った台風13号は園舎や備品など当時で32万円もの甚大な被害を与えた。



被害を受けた園舎

保育園の経営は、諮問機関として運営委員会が設置され、園児は130～140名規模の保育園へと発展していった。昭和29年の豊橋市との合併の際には、市営保育園としての移管を希望したが、豊橋市に市営保育園の前例がないため、施設は豊橋市に引き継がれたものの運営は前芝校区が行った。その後、保育園の経営に関して豊橋市と前芝保育園運営委員会との間に、児童福祉事業経営委託契約が締結された。

昭和31年、保育園・小学校・中学校合同運動会が開始された。以来、前芝三校合同運動会は現在まで受け継がれて、前芝校区民に根ざした大きな行事となっている。

竹馬演技や、ちびっこ太鼓の演技は気迫に満ちあふれ、前芝保育園の伝統となって、毎年すばらしい活動として披露されている。



運動会名物の竹馬演技

昭和34年に乳児室の増築が完了したのに続き、翌年以降に乳児寝室の完成など施設設備が充実していった。昭和38年11月に、保育園隣接地を校区で購入し整地を完了した。

昭和39年9月に保育園園舎を増改築するとともに、遊戯室・看護室も増設した。

昭和41年11月、乳児室と渡り通路の移転及び増築が完了した。また昭和44年8月には待望の給食設備が完成し、この年より新入園児保護者会が開始された。

昭和45年12月社会福祉法人育栄会として設立認可され、前芝保育園の設置が申請された。昭和46年1月1日付で、社会福祉法人育栄会前芝保育園が正式に発足した。

昭和62年（1987）より開始された前芝中学校3年生の保育交流は現在も続いている。



前芝中3年との保育交流

西浜町の区画整理に伴い住宅建設が活発になった平成8年頃より入園希望者は増加の一途をたどっていった。それに伴って園舎も増改築されていった。平成12年（2000）3月には待望のホールが完成した。入園式・卒園式・学習発表会等の会場として活用され、保育活動に大きな役割を果たしている。

前芝保育園と地域の関わり合いで特色ある行事を紹介したい。平成12年度から、園児たちは前芝校区に在住の茶道師範から茶道を学びとっている。茶道の基礎から、もてなしの心づかい、礼儀作法、抹茶のたて方・飲み方など、年間9～10回にわたって習う。茶道講座の総仕上げは、粘土をこねて手作りした抹茶茶碗を使って、母親などに抹茶をたててもてなす茶会を催している。この茶道講座を通して、園児は笑顔と共に、知らず知らずのうちに相手に対しての心づかいなどを身につけていく。

③ 前芝小学校のあゆみ

戦時中に中止されていた修学旅行は、昭和25年（1950）3月25日より京都方面に一泊二日で復活された。

昭和27年に前芝中学校で制定された校歌は、昭和48年に前芝小学校校歌が制定されるまで諸行事で口ずさまれてきた。

昭和28年7月に校旗が完成した。校旗は月桂樹の中央に『前』の文字をあしらったもので、全校のシンボルとなった。

昭和40年（1965）交通安全推進研究校としての研究発表を行った。前芝保育園・前芝小学校・前芝中学校の三校合同で交通安全教室が開催された。

昭和48年（1973）前芝小学校創立100周年を記念して各種の取り組みがされた。小学校独自の校歌が制定された。また、校区の記録写真・資料の調査・収集がされ、100周年記念誌として、編集・発刊された。

昭和51年（1976）豊橋市より学習指導の研究指定を受け、「視聴覚教材利用のあり方」をテーマにした研究発表を行った。また、それまで中学校プールを共用していたが、待望の小学校独自のプールが竣工した。

昭和57年（1982）愛知県学校保健研究大会で健康優良校として表彰された。昭和58年（1983）から、体力づくりのイベントとして、縄跳びや水泳などの単位認定級制度を組み合わせた前芝オリンピックがスタートした。

昭和59年（1984）新入生を対象とした交通安全教室が開催された。豊橋市交通安全対策担当、交通指導員、前芝駐在の協力を得て、通学路を実際に歩く訓練をした。

昭和61年県教育委員会より2年間の小中学校生徒指導推進事業の研究委嘱を受けた。

三河湾の埋め立てによる漁業補償が成立して、前芝地区の海苔養殖はやがて消滅することから、昭和62年（1987）海苔すき体験教室

を開始した。児童の代表の海苔についての発表後、海苔すきと天日干し作業を体験した。



海苔すき体験教室

視聴覚機器の教育的活用についての実践と地域素材の教材作成が評価され、昭和63年（1988）松下財団視聴覚助成に入賞した。またこの年には校舎の東半分が大規模改造工事となり、理科室などの特別教室が一新された。

平成元年、校舎西半分が大規模改造工事となり、図書室などが一新された。

三世大家族のかかわり・ふれあいが大きな効果を及ぼしていることから平成3年（1991）祖父母学級がスタートした。昔の遊びや生活を児童に伝え、ふれあう行事として続いた。

平成8年度の6年生は手書きとワープロを織り交ぜて印刷新聞『前芝タイムス』を年間8号編集・発行した。朝日新聞社の小学生新聞コンクールで朝日学生新聞社賞に入賞し、『小さな学校でも、やればできる』という自信と誇りを全校児童にもたらせてくれた。

平成10年（1998）豊橋市学校保健優良校、愛知県健康推進校として表彰された。バスケットボール女子が市内中央大会で優勝した。

平成15年（2003）総合防災訓練が企画され地域とのかかわりの中で災害に対しての防災のあり方、学校や子どもたち、家族のあり方について実践的な活動・講演会が展開された。

平成16年（2004）校舎や体育館についての耐震化大規模工事が実施された。また、3校合同運動会で全校側転が披露され、地域の大歓声を受け、恒例の種目として続いている。

④ 前芝中学校の歩み

昭和22年(1947)4月、六・三制の施行と共に、新制中学校の名の下に前芝中学校が誕生した。発足当時は、まだ校舎もなく、前芝小学校の2階建て校舎の一部を教室とし、廊下の中央廊下を職員室として使う、間借りの形をとっていた。この年に木造平屋建て校舎が完成し、昭和23年3月に、現在の中学校体育館付近に講堂が完成した。さらには、中学校建設予定地として耕地整理組合が確保しておいた塩見塚に2,775坪を整地し、昭和24年8月に木造2階建て本館校舎が完成した。



つぎつぎと充実していった校舎

昭和27年(1952)校訓が「自ら学ぶ、たくましい生徒」に定められた。また、校長の恩師が石森延男氏だったことから、校歌の作詞が石森延男氏、作曲は東京音楽大学教授の下総皖一氏という一流の布陣で制作された。校旗も制定された。

昭和28年(1953)9月17日、台風13号により校舎は床上浸水など被害を受けた。全生徒の3分の1以上の家庭が罹災し、1週間休校とした。

昭和30年(1955)3月1日、町村合併により前芝村が豊橋市に編入され、豊橋市立前芝中学校と改名された。

昭和37年(1962)プールが竣工した。当時の水泳指導は豊川の川岸で開催されていたが、保育園・小学校・中学校の子どもが共用で活用する市内でも数少ない施設であった。

昭和38年、制服検討委員会により女子の制服にイートン型が決定し、男子の制服は学生服と決定した。

昭和45年JRCに加盟し、奉仕活動に積極的に取り組んでいく契機となった。国道23号線に架かる横断歩道橋のボランティア清掃活動に端を発した自主的で広範囲の530活動はボランティア推進委員会へと発展した。福祉活動と合わせ平成18年に日本赤十字社から15年勤続の銀色有功章表彰を受賞した。

昭和55年(1980)豊橋市農業振興課より農業後継者育成事業の協力校の依頼を受け、平成16年度に補助金が打ち切られた後も、地域の協力で前芝ふれあい農園は続いている。

昭和63年(1988)1月、生徒会主催で百人一首大会がスタートした。生徒手作りの羽織を教職員が着て、上の句を詠み上げ数人単位の縦割りグループでとる伝統は、現在も続いている。

平成5年(1993)福祉実践教室を開始し、車いす体験、点字講習、手話体験を通しての福祉体験活動を全学年で展開した。この福祉体験活動は平成18年度現在も続いており、前芝中学校の特色ある行事となっている。

平成7年(1995)職業体験学習を開始し、1年生は農業体験、2、3年生は工場・店舗などの職業体験をした。以後、1年生で福祉体験、2、3年生は工場・店舗などの職業体験が展開されている。

平成12年に豊橋市教育委員会より3か年の研究委嘱を受けた『生きる力をはぐくむ学校図書館』をテーマに、読書指導や情報を活用する地道な活動は高い評価を受けて、平成16年に全国学校図書館賞を受賞した。

生徒数の少ない中学校ではあるものの、部活動が活発でどの部も大会で健闘している。平成17年度全国中学校体育大会ハンドボール大会に出場し、勝利する快挙を遂げた。

2 社会教育と文化

(1) 農業補習学校

大正8年(1919)3月、前芝小学校に前芝村立農業補習学校が併設された。小学校卒業後の農業青年や労働青年などの教育機関として開設された。

修身、国語、算数、理科、体操、農業の授業が週あたりで30時間、1年間で40週、2年間の修業年限で展開された。

農業補習学校は小学校教師による夜学教育で、農繁期には休んでいた。この点は季節的であったものの、科目やカリキュラム編成も年間計画に基づいて展開されていた。

(2) 青年訓練所

大正15年(1926)4月、勅令第70号が基になって、青年訓練所令が公布されたことを受けて、大正15年7月、前芝村立青年訓練所が農業補習学校に併置された。修身公民科教練、普通学科、職業学科の4科目で修業年限は4か年であった。こちらは16歳から20歳までの男子を入所させていた。

その後、昭和10年に青年学校が開設されている。昭和10年に青年学校令が成立したことを受けて、それまで設置されてきた農業補習学校と青年訓練所とが統一され、昭和10年3月に、職業に従事している青年が心身を鍛錬し、教養・徳性を高めることを目的とした前芝村立青年学校が開校した。昼間は働いているために、夕方から夜間にかけて、小学校の教室を使用した授業が実施された。

終戦後の昭和20年11月10日付けで当時の福本柳一愛知県知事宛てに申請された前芝村立青年学校の学則改正に関する認可申請をひもどくと、現在の学校経営案に相当するもので、国民学校卒業者や12歳以上を対象とした普通科(修業2年)、普通科修了者や国民学校卒業者、14歳以上で普通科修了に相当する素養

ある者を対象とした本科5年、本科卒業者またはそれに相当する素養ある者を対象とした研究科1年、さらに1年の専修科が開設されていたことが記されている。

学習内容の詳細を見ると、国語、数学、理科、音楽、英語、体操及び競技、修身の基礎科目に加え、農業及び園芸、水産に関する実践的な内容が教授された。女子に対しては、この他に家事・裁縫・手芸の内容も合わせて教授されていた。

(3) 戦時体制までの婦人会

婦人会のルーツをたどると前芝村の各字に存在した部落ごとの婦人の集いであった。統一された婦人会の発足は満州事変と上海事件など非常時が叫ばれた頃になる。国の機運に伴い、婦人会の統一を図り、大日本国防婦人会前芝支部が昭和12年に設立された。前芝村の婦人は世帯ごとに加入し、主に出征兵士の歓送、慰問袋の発送、傷病兵の慰問、留守家族への慰問や手助け、郷土防衛などに主力が注がれた。



前芝海岸で出征兵士を歓送

昭和17年(1942)愛国婦人会、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会の婦人3団体を合同して、新たに大日本婦人会が組織された。昭和20年(1945)太平洋戦争終結と同時に大日本婦人会前芝支部を解散し、ひとまず戦時下での婦人会の役目はピリオドをうった。

本来の婦人会は後に再結成されていった。

(4) 戦前戦後の青年団

明治維新後、青年の団体としてのまとまりが存在し、東ら組・西土組（前芝町）、鶯連（梅藪町）、盛泉連（日色野町）があった。

これらの組織は、15、6歳から結婚までの男子数十名によって構成されていた。そして、その集会は主として氏神祭礼などの村の行事を機会に、お互いに親睦をはかり、レクリエーションを目的とすることが多かったようである。娯楽的な色彩が強かったとしても、集団の中で青年としての自覚を促し、公民としての資質を育てる場として貴重な組織であり、活動であったと言えるだろう。

明治44年に、前芝村青年会として統一され、夜学会など意欲的な活動や学習が実施されたのである。前芝村青年会前芝分会会則の第1条には、次のように書かれている。

目 的（第壹条）

本会ハ青年者ノ親睦智徳ノ涵養身体ノ鍛錬風紀ノ振作ヲ企図シ其公民タルノ美德ヲ養成スルヲ以テ目的トス

戦後まもなく、民主的な青年団が結成されて、彼らは、機関誌の発行、敬老祝賀会、苗代の消毒、盆おどり等を中心になって行ってきたのである。

この青年団に入団できるのは、高校を卒業した若者（同年令）という一応のきまりがあって、本校区では約30名ほどの者が団長を中心にして活動した。その団長は、上部組織の豊青協と連絡を密にするパイプ役も果たしていた。

しかし、この青年団の活動も、昭和40年代以降、大学進学者が急増し、前芝を離れる者が増える中で次第に衰退し、昭和50年代半ば頃にはこの組織そのものが姿を消していかざるを得ない状況となったのである。

(5) 戦後の社会教育学級

戦後の日本では、地域の生活・文化・教育のレベルを高めようとする気運が急速に高まっていったが、ここ前芝校区も例外ではなかった。

昭和24年6月、「社会教育法」が公布された。新しい時代を迎え、地域社会に直結した教育活動の必要性が叫ばれ、社会学級・青年学級・婦人会活動などが活発に行われるようになったのである。

社会学級は、村内一般成人の組織的な教育活動であり、一般教養・生活改善・生産等に関連した講習会や講座が開催された。

青年学級は、義務教育終了後、上級学校に進学しない一般勤労青少年を対象として、教養と資質を高めるために計画的、継続的に開設されたもので、昭和25年から始まった。

婦人会は、戦前に発足したが、婦人会本来の民主的文化団体として、昭和23年に新たに前芝村婦人会として組織された。家庭生活改善・結婚改善・教養向上などが目標とされた。発足当時の会員数は657名で、その後長く積極的な活動を行ってきたが、平成10年代にはほぼその活動を終えるに至った。

こうした社会教育活動、文化活動が盛んになるに従って、活動の拠点、場所を新設しようという要望が高まった。昭和23年3月に日色野公民館、昭和25年3月に梅藪公民館、そして昭和27年8月に前芝公民館が相次いで建設されたのである。村民の集会・娯楽・教養・文化的活動の大切な場所として、その利用は盛んになった。また、祭礼の余興、社会教育映画、農業漁業組合の集会、講演会等の会場として大いに役立っていった。

高校全入、大学進学者もほとんどという現在であるが、地域力向上のために今までとは違った形での「社会教育学級」の充実が望まれる昨今であるように思われる。

3 史跡・文化財・奇祭

(1) 前芝灯明台と前芝湊

寛文8年(1668)吉田藩主小笠原山城守長矩の乗船した船が夜分遭難しかけた。さっそく、前芝に灯明台が建設され、翌9年3月に灯が点された。



当時、近くには潮見坂、伊勢の神島にしか灯明台はなかった。この灯明台は津波(高潮)や台風にも何度も遭遇し、その度に倒壊したり、流出したが、その都度ただちに修復され、灯を点しつづけてきたのである。前芝灯明台は昭和32年(1957)9月19日、豊橋市有形文化財に指定された。

今はその活動を終え、昭和29年(1954)に建設された新灯台にバトンタッチされた。

前芝は豊川の河口にあり、湊として有利な条件を具えていたので、船町とともに繁栄してきた。当時、船町からは年に4千人余りの渡海者があつたらしい。前芝湊からお伊勢参りの客も相当あつたようだ。川岸に伊勢屋、大崎屋、加賀屋、池田屋、五徳屋などの宿が軒を並べ、湊は賑わいを呈していた。

前芝湊で廻船問屋を営んでいた加藤家は安泰丸など多数の船を持ち、江戸、下田、鳥羽、熱田方面へ廻船し、明治中ごろまで湊の中心的存在であった。

また、前芝湊は文化の湊でもあつた。江戸時代中期以降、文化の中心が江戸に移った頃前芝湊にも文化が芽生え始めた。

当時、一流の文化人が競うかの如くこの地

を訪れた。彼らの心を動かしたものは何だったのだろうか。

歌人加藤千陰や儒学者細井平州、国学者本居大平(宣長の養子)など一流文化人が、この湊に立ち寄り、前芝人に大きな刺激を与えている。

彼らは前芝湊で廻船問屋をしている加藤家の別荘「観魚楼」に宿泊、湊の雄大な姿と穏やかな川面の情緒に感動、置土産に色紙・短冊などに文学の香り高い作品を残している。

観魚楼の主加藤広正は、渥美の糟谷磯丸と並ぶすぐれた歌人で、漢詩もよくしたようである。広正は観魚楼で、俳句の会を頻りに開き、句集を後世に残している。そこから生まれた村の俳人に一步、徂来、一魚らがいる。

広正の句に
くそとで焚く風呂も家例や田植えの日
というのがある。

かくして、前芝湊の学問・文化熱はいやが上にも高まり、寺小屋が西福寺などで開かれ、有能な人材がつぎつぎと生まれ、育っていったのである。

(2) 空野甚七碑

碑は前芝灯明台の西隣に建っている。安政元年(1854)三河海苔を創業した前芝の住人空野甚七翁の功を讃え、その労を後世に伝えるため設けられたのである。

明治26年(1893)1月前芝が主となり、梅薮、日色野、平井、伊奈、下佐脇、御馬各村協賛のもとに設立された。

この碑は高さ2m30cm、



厚さ18cmの石碑で、青木海岸の堤防上にある。碑文には「海苔創業者空野甚七碑」と記されている。

(3) 厄祭

いつ頃からこの神事が始まったのか定かではないが、明治初期までは厄祭の際に、神前で二個の釜に湯を沸かし、その熱湯を笹の葉で、厄年の者に打ちかける風習が残っていた。従って、華美が美德とされた江戸中期頃ではないかと推測される。

例年旧暦正月10・11日の2日間、厄払いの神事が神明社で行われてきた。男は25歳、42歳、61歳、女は19歳と33歳が厄男・厄女に該当する。勿論、数え年でのことである。

旧正月を迎えると、若者の生活の拠点が会所へと移る。主に25歳の者の家が会所を提供し、丸10日間、寝食を共にする。美食に明け、酒に暮れ、時には綺麗どころを呼び乱ち騒ぎである。会所を提供する家も大変である。当日は会所でついた餅を手拭にくるみ、笹竹に縛り大八車に積み込む。61歳の厄男を乗せ、他の者がそれを挽く。一升瓶を片手に…。道々、酒をふるまい、餅を投げながら神明社に向かう。多くは海岸通りを練り歩いた。神事後、餅投げが始まる。櫓から、拝殿から…。壮観そのものである。

しかし、この神事も平成に入ると大きく様変わりした。祭典は一日、2月の第2土曜日



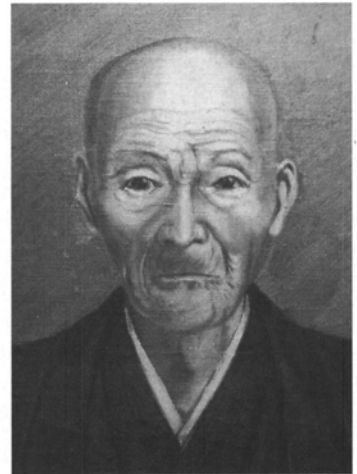
か日曜日。会所はなし。勤め人がほとんどで、しかも若者の家離れが急増して、中日新聞が「天下の奇祭」とうたった「厄祭」も今は昔の物語と化し、その存続すら危ぶまれる今日この頃である。

4 文化の華開く —人物列伝—

(1) 空野甚七

空野甚七は文化11年3月15日(1814)前芝村に生まれ、幼少の頃蛤珠庵に学ぶ。家業は農耕のかたわら海に出て漁をし、生計をたてていた。

彼が海苔養殖に着目したのは、嘉永6年(1853)40歳の冬の冬のことである。翌安政元年8月、椎、檜、栗、栃などを海中にさすと、海苔の付着が予想以上に良好だった。



このことが海苔の養殖事業に生涯を捧げることになったと想像される。2年、吉田藩士田中敏次郎を通し、ヒビ建の許可を求め、翌3年、自ら願主となり出願、了解を得た。4年には海苔養殖仲間を結成、同志と海苔を採取製造し、乾海苔を藩主松平信古に献上した。三河海苔の誕生である。

安政5年、前芝、梅敷、日色野、伊奈、平井、五か村代表了解のもと、海苔場拡張を願い出て、領主の許可をもらい、海苔養殖事業は飛躍的に拡大した。

しかし、全てが順調だったわけではない。白魚業者との権利争いであり、五か村内部の確執であった。糞笠騒動である。二つとも甚

七等の努力で解決した。

その後、海苔養殖場は西浜から三河湾一帯へと拡張し、全国屈指の海苔生産地としてその名をはせた。

甚七はその功績が認められ、明治27年に愛知県知事より表彰された。またその功績を永久に語り継ぐ証しに、「海苔創業者杵野甚七碑」が、明治26年に建立された。

彼は明治37年8月3日死去。90歳の長寿を全うした。

(2) 加藤六蔵

その祖先は加藤肥後守清正に仕え、文禄の役で大功をたてた片岡正義である。その功により加藤姓を許された。正義の孫広忠の代に主家は滅亡、「二君に仕えず」と帰農し、三州牛久保町長山に居住、まもなく前芝に移住した。

六蔵は安政5年(1858)4月前芝に生まれ、幼名は幸三郎、号は尚正または望山と称した。

明治5年、豊橋の穂積晴軒の英学塾に入り英語・漢学・数学を学んだ。同7年には上京して福沢諭吉の慶応義塾に学び、その感化を受けた。

卒業後、英国留学を志したが、母危篤の報に接し、急遽故郷に戻った。

方針を変え、家業に専念。醤油醸造、米穀の販売、海運などに力をつくす一方、地方の社会開拓にも並々ならぬ力を注いだ。

六蔵が魁きざしとなって豊橋商工会議所を設立、会頭になること3回、会社を創設、鉄道の敷設計画等多方面で活躍した。教育事業には福沢の感化もあり、特に関心が深く、明治13年に宝飯郡教育会長に推されると、懸案であった中学校創設を企図、郡内有力者の力を結集、同14年6月、三河最初の中学校である宝飯郡中学校を国府に創設、推挙されて初代校長となった。

明治19年、圧倒的多数の支持をえて県会議

員に当選。これが彼の政界進出の端緒となった。以後、4回当選した。

明治23年には第1回衆議院議員選挙が行われ、見事に勝利し、通算6回の当選を果たした。



議会では、一貫して緊縮政策を掲げ、財政慎重論をとり続けた。委員長、特別委員、理事等の要職を歴任すること50回を超えた。とりわけ、明治34年12月18日の第16回議会における予算案に対する質問は面目躍如たるものがあつたと伝えられている。

生来沈着にして、物事に動かされぬ気性により、国民の代弁者としてその名をあげ、多方面にわたる功績を残した。島田三郎、犬飼毅、杉浦重剛、尾崎行雄、大隈重信など著名な士との交友も深かった。

明治42年6月21日、52歳の若さで病没した。大正4年、宝飯郡長島ノ内税等が中心になり、東三各地の有志に呼びかけ新宮山上に彼の銅像を建立した。この銅像は第二次世界大戦中徴発され、今は台座とその銘碑だけが残っている。

(3) 林 虎雄

会場が一瞬ざわめいた。社長自らが登場したのである。発展途上にある日本電装の社長が、工場見学の中学生の前に突然姿を現したのだ。彼は自分の出身地前芝の生徒の前で、熱弁をふるい、自らが起こした会社の現状と将来について語った。とりわけ、養成工の存在をあげ、子どもたちの注目を惹いた。

昭和35年夏のことである。

その年は、前芝の中学生の進路に異変が起

きた。進学を決めていたものが、方向変換をし、電装の養成工受験になだれ込んだのである。

林虎雄は明治26年（1893）1月18日前芝に生まれた。愛知県立第四



中学校（時習館高校）を卒業後、名古屋高等工業学校（名工大）に学ぶ。大正6年、三井物産に入社。翌年、豊田紡織に転社、同11年取締役就任する。

昭和18年、トヨタ自動車取締役。戦後の混乱期の同24年日本電装が設立され、初代社長となる。以後、昭和42年会長になるまで20年近く、その座にあり、電装を日本の一流企業に育てあげた。

会長就任後は、体調を崩し昭和45年9月8日77歳で死去。従四位勲三等旭日中綬章を同41年に受賞する。

社長時代、当時の豊田自工石田退三社長の隣に座って撮った写真が何故か印象に残る。その顔には、豊田グループを牽引しているのだという自負に溢れている。もって瞑すべしである。

(4) 平野賢治

独立独歩の人である。天衣無縫でもある。それでいて人の気をそらさない。一昔前の話になるが、前芝校区成人式での祝辞は、今も語り草になっている。自分流の健康法の秘訣を披瀝し始めたのである。「朝、顔を洗う時、水を鼻で吸い込んだり、吹き出したりするだけだから誰にでもできる。胃腸の方は寝る前に臍の周りを200回位ぐる

ぐるなでるだけ。びっくりするほどよくきくよ」

聴衆は哑然とし、それからひどく感心したのである。

賢治は明治33年（1900）8月20日、前芝村青木の青木家の次男として生まれ、25歳の時に平野家に養子縁組した。平野家は代々丸文平野屋の屋号で肥料、米穀を商っていた。賢治はこれに養鶏用の飼料を加えた。

昭和6年、幾多の苦労を重ねた後、念願のマルト豊橋飼料合名会社を設立した。工場は船町駅前の交通至便な地にあった。

会社を運営しながら、昭和16年から5年間、前芝村の村長をつとめた。当時、県下で一番若い村長だった。当然のことながら、戦後レッドパージにかかった。

一時苦境に立った会社も回復し、最盛期を凌ぎ、順調に発展した。本社も柳生川沿いに移転、千葉、姫路、門司など十数か所に子会社を持ち、日本飼料工業会副会長などを歴任。地元では豊橋商工会議所会頭もつとめた。

河野一郎氏とも昵懇の間柄で、子息で現衆議院議長の洋平氏は「豊橋のおじいちゃん」と呼んでいた程の仲である。

第二次世界大戦前からのつきあいである。

昭和56年子息照二氏に社長を委譲、会長となる。

昭和60年1月17日死去。

84歳の天寿を全うする。日ごろの健康法のおかげか。

昭和46年4月、勲五等を授与される。むべなるかな。



(5) 山内俊次

勤務評定反対闘争華やかかりし昭和30年代半ばに、全国小学校校長会会長となる。文部省当局と現場教師の狭間に立って苦悩している顔が、今も鮮やかに蘇る。当時、俊次は東京都千代田区の永田小学校の校長であった。

明治33年5月25日、前芝村日色野に生まれる。前芝小学校を卒業後、岡崎師範学校に進学。卒業後一宮小学校に1年勤務。その後岡崎師範学校附属小学校に8年間勤めた後、東京移住。千代田区内の小学校に奉職する。35歳の若さで校長になった。当時としても異例のスピードであったらしい。



連合国の統治時代初期、永田小学校は日本の学校教育のシンボルであり、代表校でもあった。司令官のマッカーサー元帥やヘレンケラーなどが視察に訪れている。

俊次はこの永田小学校に17年間校長として勤務した。日本算数協会の初代会長も歴任している。

退職後、俊次は教育界の代表として宮中晩餐会に招待されている。

永田小学校退職後はお茶ノ水女子大の講師を勤めている。

昭和43年4月13日死去。67歳であった。勲五等を授与される。

生前、彼はクリスチャンになり、英語もかなり堪能であったらしい。経歴で異彩を放っているのは、東京オリンピック鼓笛隊の指導をしたことであろう。

とにかく、万事に多彩な人であったらしい

とは彼を知る人の一致した評価である。

(6) 塩野谷九十九

昭和20年代から30年代にかけて、日本では、マルクス経済学旋風が吹き荒れた。

その中で敢然としてケインズ経済学を標榜しつづけたのが九十九その人であった。

当時の校区の若者にとって、彼は大きな到達目標であり、憧れの的でもあった。少しでも彼の存在に近づきたいと、努力したものであった。

九十九は明治38年(1905)10月12日、前芝村日色野に生まれる。前芝小学校を卒業した後、県立豊橋中学校(時習館高校)に学び、東京商科大学に進む。昭和5年に卒業。その後、名古屋高等商業学校に勤務。昭和18年、同校の教授となる。

戦後、学制改革により、昭和23年9月名古屋大学経済学部教授。同28年経済学博士を授与される。更に、同40年代から4年間経済学部長を勤める。

昭和44年、定年退官。名誉教授となる。

同50年秋の叙勲で、勲二等旭日重光章を授与される。

昭和58年6月4日死去。

享年77歳であった。

彼の生涯かけての仕事は、ケインズ経済理論の日本への紹介と確立にあった。従って著書も多い。その一部を紹介すると
アメリカ経済の発展(昭和16年)
ケインズ経済学の展開(昭和23年)
経済発展と資本蓄積(昭和26年)

翻訳書には
ケインズ「雇用・利子及び貨幣の一般理論」



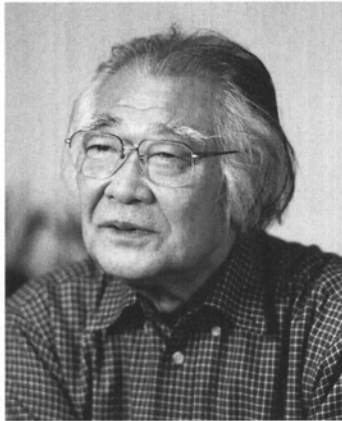
などがある。

令息塩野谷祐一氏は元一橋大学学長であり日本学士院賞を受賞している。シュベンター研究の第一人者である。(九十九=つくも)

(7) 松下芝堂

10年近く前、芸術院賞受賞のニュースが校区内を駆け巡ったことがある。書で一家をなしているとの風聞は耳にしているも、まさかそこまでとは…。人々は驚きかつ畏敬の念が生じた。

本名は須砂雄。大正15年(1926)、宝飯郡前芝村前芝に生まれる。前芝小学校を卒業した後、昭和18年蒲郡農業学校に進学。その頃から書に関心を抱く。折りしも、東京で活躍していた鈴木翫軒が、渥美に帰郷していたことを



知る。前後もわきまえず駆けつけ、教えを請う。昭和22年、晴れて彼の門下生となる。彼の書に対する一途な思いが通じた瞬間でもあった。人の出会いとは奇妙なもの。

苦節八年、昭和30年に第十一日展に初入選。以後、順調な書歴を辿る端緒となるのである。同34年には日展特選。同38年、日展審査員と、書の世界の頂点を目指し一気に駆け上っていった。昭和42年には日展の評議員となり、平成6年には文部大臣賞を受賞する。

平成10年、第二十九回恩賜賞・芸術院賞を受賞し、併せて第五十一回中日文化賞を獲得、文字通り中部日本書道界のリーダーとなったのである。

更に平成14年の秋の叙勲では勲四等旭日小綬章を受賞する。

芝堂は79歳の今も、多くの弟子をかかえ、その中から日展入選者を輩出している。前芝出身の庄田翠苑(北河綾子)も、その一人である。

中部日本の書界の命運は、生来負けん気の芝堂の手腕にかかっていると書いてもいいだろう。

彼の無二の親友坂本親民氏は「小さい頃から負けることが大嫌い。相撲をとって、負けても負けても挫けず、もう一番と、向かっていく人でしたから、彼ならやるでしょう」と語っている。

芝堂の作品は夥しい数に及ぶが、校区内だけでも数か所にのぼる。後世にその偉業を留めるためにも、一箇所にまとめ、管理・保存する必要があるのではなかろうか。

(芝堂=しどう)

後につづけ昭和世代！！

昭和世代の最年長者は既に80歳になろうとしている。その中には後世に名を留めるだろう、と推測される人物が全くいないわけではない。幾人かはいる。しかし、ここに挙げた7人と比較し、そのスケールの大きさや業績の社会に及ぼした影響などを考えると今一步、という感がする。勿論、完成途上の道である。是非、大輪の花を咲かせ、メジャーな存在になってほしいものである。“がんばれ、昭和世代よ”と声を大にして励ましたい。

年 表

時 代	日 本	西 暦	年 号	校 区 周 辺
縄 文 弥 生				台地で狩猟・漁撈・採集の生活ー稲荷山貝塚 豊川の沖積地帯で農耕を始めるー瓜郷遺跡 日色野貝塚 塩見塚の銅鐸
大 和	古墳をつくるようになる 大和朝廷の統一(4世紀初頭)			古墳時代の終わり頃、元梅藪・前島に人々がす み始めるー元梅藪遺跡 穂の国が三河国に入る。
奈 良	奈良に都を移す(平城京)	710		三河国国分寺建立
平 安	京都に都を移す(平安京)	794		
鎌 倉	源頼朝鎌倉に幕府を開く	1192		
室 町	鎌倉幕府亡ぶ	1214	仁和元	前芝神明社創立(推定)
		1333	建保2	日色野菱木野天神社創立
		1503	文亀3	日色野神泉寺建立
		1506	永正3	前芝西福寺建立
	キリスト教伝来	1540	天文9	大津波(高潮)で前芝・元梅藪大被害。奈切川 流路変更
		1556	弘治2	梅藪スサノオ神社創立。梅藪観音寺中興
		1558	永禄元	前芝蛤珠寺建立
安 土 桃 山	室町幕府亡ぶ 豊臣秀吉全国統一	1590	天正18	
江 戸	徳川家康征夷大將軍となる	1603		
		1622	元和8	高潮襲来
		1623	元和9	大津波(高潮)あり。梅藪に聖観音像漂着、こ れを了源寺にまつり、観音寺と改称
江 戸		1669	寛文9	吉田城主小笠原山城守前芝に灯明台建設

時代	日 本	西暦	年 号	校 区 周 辺
江戸		1680	延宝 8	台風のため灯明台破損。村は高潮の水害。以後1789までに5回台風の被害あり。その度に灯明台破損
	元禄文化爛熟	1696	元禄 9	加藤新田開発
		1758	宝暦 8	梅藪水月院建立
	松平定信の改革	1787	天明 7	
		1788	天明 8	前芝村大火、村の大半焼失。
	町人文化が栄える	1805	文化 2	前芝村、牟呂村と網につき争う
		1845	弘化 2	前芝の川施餓鬼行事始まる
		1850	嘉永 3	牟呂及び前芝村と吉田魚町が魚販売権争いを始める
	ペリー浦賀に来航	1853	嘉永 6	
	江戸幕府亡ぶ	1867	慶応 3	前芝大火、七割焼失
明治	明治維新	1868	明治元	豊川下流海苔場騒動解決
	廃藩置県	1871	明治 4	大政奉還により本校区は豊橋県となる
	学制発布	1872	明治 5	本地区は額田県となり、更に統合で愛知県となる
	徴兵令施行、地租改正	1873	明治 6	巴水学校開校（西福寺）
		1876	明治 9	巴水学校を前芝学校と改称、西二番地移転
		1879	明治12	梅藪学校開設
		1882	明治15	菱木野学校開設
		1885	明治18	前芝・梅藪・日色野各漁業組合発足
	大日本帝国憲法発布	1889	明治22	三河地方高潮来襲 前芝村・梅藪村・日色野村を合併、前芝村と呼称
		1892	明治25	小学校令施行。前芝尋常小学校と改称
	日清戦争勃発	1894	明治27	
		1895	明治28	小学校校舎を稲場一番地に新築
	日露戦争勃発	1904	明治37	西浜海苔場契約書締結
		1905	明治38	白魚宮中献上始まる
		1907	明治40	前芝新灯台建設 六条潟組合契約書締結
大正		1912	明治45	前芝尋常小学校に高等科併設
		1912	大正元	電燈開設

時代	日 本	西 暦	年 号	校 区 周 辺		
大 正	全国に米騒動起きる 関東大震災	1913	大正 2	小学校敷地216坪拡張 前芝・梅藪忠魂碑建立 豊橋市に米騒動起きる		
		1917	大正 6	前芝村及びその近郊にペスト流行		
		1918	大正 7	豊橋市に米騒動起きる		
		1919	大正 8	前芝村農業補習学校前芝小学校に併設		
		1922	大正11	前芝郵便局開設 前芝大橋架橋渡初め式		
		1923	大正12	県道前芝御油線・国府前芝線・小坂井前芝線 認定される 前芝小橋架橋・外浜埋立て		
		1924	大正13	二宮尊徳像建立		
		1926	大正15	三河地方台風・高潮来襲。前芝大橋流失		
		昭 和	満州事変始まる 第二次世界大戦始まる 第二次世界大戦終結	1927	昭和 2	前芝大橋復旧工事完了 前芝尋常高等小学校校舎、塩見塚一番地に移転
				1929	昭和 4	県道前芝港豊橋線認定
1931	昭和 6			前芝村役場を稲場68番地に新築移転		
1933	昭和 8			日本人造羊毛株式会社誘致反対運動起こる		
1934	昭和 9			漁民の反対運動に人毛会社建設を放棄		
1935	昭和10			前芝村立青年訓練所を青年学校と改称		
1941	昭和16			国民学校令施行。前芝国民学校と改称		
1945	昭和20			豊橋大空襲・豊川海軍工廠爆撃 前芝診療所創設		
1947	昭和22			教育基本法制定。校名を前芝小学校と改称。 前芝中学校校舎を塩見塚一番地に建設・開校		
1948	昭和23			日色野公民館落成式		
1949	昭和24			小中学校毎に父母教師会設立 網ひびを試験的に使用		
1950	昭和25			梅藪公民館落成式		
1951	昭和26			三ッ葉保育園を村営に移し、前芝保育園と改称 前芝村農業委員会発足		
1952	昭和27	前芝公民館落成式				
1953	昭和28	台風13号来襲。高潮の被害を受ける				

時代	日 本	西暦	年 号	校 区 周 辺
昭 和		1953	昭和28	本村養蚕業皆無となる
		1954	昭和29	加藤村長・石河議長は豊橋市長・議長に合併を申し入れる。合併準備委員会設置。村議会豊橋市との合併を決議
		1955	昭和30	中学校講堂で解村式・豊橋市に合併。前芝支所開庁
		1957	昭和32	前芝灯明台、豊橋市指定文化財に指定される
	伊勢湾台風襲来	1959	昭和34	「前芝村誌」刊行 前芝大橋完成
		1964	昭和39	前芝小学校、鉄筋校舎完成
	イザナミ景気到来	1965	昭和40	前芝灯明台愛知県史跡に指定される
		1966	昭和41	前芝灯明台復元完成
		1967	昭和42	国道23号・前芝歩道橋完成
	三億円事件発生・学園紛争続発	1968	昭和43	豊橋市消防署前芝分遣所開設
	アポロ11号月面着陸	1969	昭和44	漁業補償締結
		1970	昭和45	豊橋市消防署前芝分遣所、出張所に昇格
		1971	昭和46	豊橋市立前芝小学校全校舎の鉄筋化完成
		1973	昭和48	豊橋市立前芝小学校創立百周年記念式典開催
		1975	昭和50	豊橋市前芝地区市民館開館
		1979	昭和54	前芝灯明台廃止
	日本人男女の平均寿命世界一	1983	昭和58	国道23号・豊橋バイパス前芝 I C ～神野新田 I C 開通
	国鉄民営化（JRに）	1987	昭和62	
	リクルート事件	1989	平成元	
	湾岸戦争勃発	1991	平成3	
		1995	平成7	前芝・梅藪漁業共同組合の豊橋漁業共同組合へ合併
	薬害エイズ事件	1996	平成8	
	臓器移植法施行	1999	平成11	豊橋漁業共同組合解散
	2001	平成13	西浜町、前芝住宅が前芝校区に加入	
初の日朝首脳会談	2002	平成14	西浜大橋供用開始	
国内に鳥インフルエンザ発生	2004	平成16	「校区ふれあい夏まつり」開催	

参 考 文 献

前芝村誌
 小坂井町誌
 この人と語る
 母なる豊川・流れの軌跡
 共同浴の世界
 六条潟と西浜の歴史
 豊橋市地域防災計画（資料編）

豊橋市西部農協のあゆみ
 05豊橋の商工業
 川と前芝
 世界農林業センサス（1960・2000）
 世界の記録（共同通信）
 東三河産業功労者伝

編 集 後 記

編集委員会を結成直後、病気で降板する者、突然病に倒れ、急逝した者等幾つかの蹉跌に見舞われ、難航を極めました。加えて、年が改まると私が入院・手術…。委員会は一時開店休業状態。

その分、その後は大車輪でした。何度も会議を開き懸命に遅れを取り戻しました。

歴史の専門家不在の編集委員会のこと執筆は思うに任せませんでしたし、もとより万全なものではありません。紙数も限られています。そんな閉塞状況の中で、真摯に取り組んだ執筆委員の努力には並々ならぬものがありました。

これを機に次のステップへの機運が芽生えれば望外の幸せです。

終わりに本小冊子発刊に際し、快く資料の提供や数々のご教示・ご示唆をいただきました校区の皆様方に、心より厚くお礼を申し上げます。
 （北河 久司）

前芝校区史編集実行委員

【編集委員】

編集委員長	校区総代	牧平 良衛
編集委員	前芝町総代	青木 頼夫
同	梅敷町総代	牧野 浩巳
同	西浜町総代	引地 幸雄
同	前芝住宅総代	青山 浩二
同（執筆委員）	元牟呂小校長	北河 久司
同（執筆委員）	元新川小教諭	牧平 興治
同（執筆委員）	蒲郡南部小校長	山本 章司
同（執筆委員）	前芝中教頭	小林 孝壽
同（執筆委員）	元前芝小教諭	林 茂男

平成16年度総代

校区総代	牧野貴久也
前芝町総代	西土 勇
日色野町総代	山口 利幸
西浜町総代	鈴木 健式
前芝住宅総代	打桐 康志

平成17年度総代

校区総代	加藤 正敏
梅敷町総代	春田 友良
日色野町総代	塩野谷 敏
西浜町総代	引地 幸雄
前芝住宅総代	大竹美喜夫

【校区史編集サポーター】

豊橋市職員 前田 豊彦

【協力者】（敬称略）

坂本 親民	平野 照二	林 矩道
岩口 直敏	西土 昌孝	鈴木 伸明
若子 正	中河 正紀	小林 友治
小林喜平次	柰野 勇	加藤 郷子
加藤 精一	平松 賢介	池田はつ子

校区のあゆみ 前芝

平成18年12月25日発行

編 集 前芝校区総代会
 前芝校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 株式会社 きょうせい

R100

当紙配合率100%再生紙を使用しています





2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City
つながり ひろがる 未来 豊橋